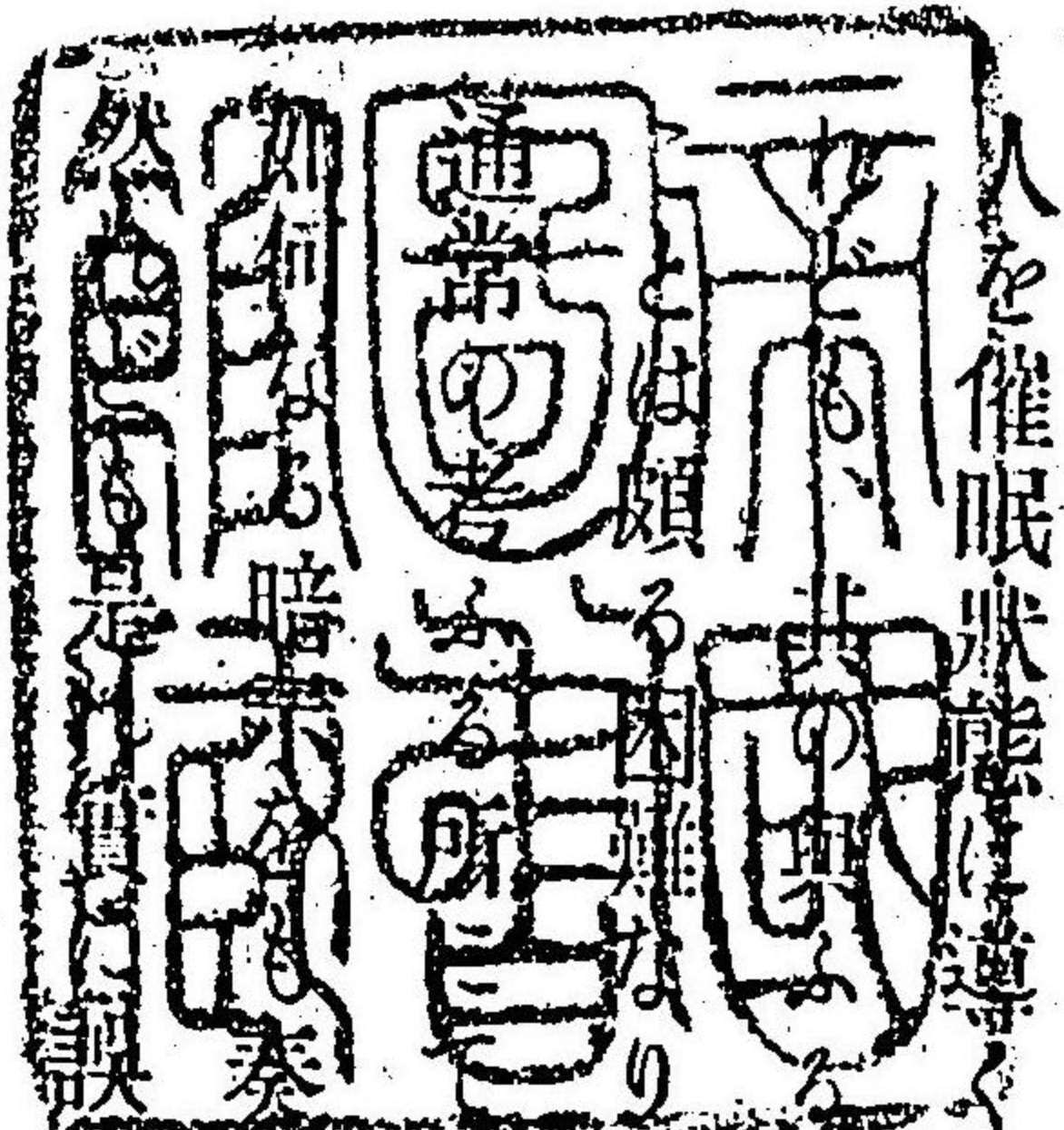


東京內科醫院
催眠術主任 熊代彦太郎先生著

催眠法
奧義
催眠術心理全書

東京 大學館發兌



人を催眠状態を導くことは、さして困難を感じるものにあらず
 とも、其の興ふる暗示をして、百發百中の効を全うせしむる
 とは頗る困難なりとす。

通常の考ふる所とは、苟くも催眠状態をだに惹起せしめば、
 如何なる暗示をも奏効せしめ得べしといふに在るが如し。
 然るも是れ實に誤解の甚しきものにして、同じ深き催眠状態

即ち睡遊状態に於ても、人に依つて暗示受否の趣を異にするも
 のにして、甲の受くる所のものは、乙の拒む所となり、乙の受
 くる所のものは、甲の拒む所となるが如きは、催眠術者の屢々
 経験する所たり。

催眠術の秘訣は、催眠状態惹起の方法にあらずして、暗示奏効

明治
 38 4 29
 内交

の徹底にあること明なりとす。而して其の之を得る方策は心理原則の上に運らさるべからず。されば催眠術者に心理學の必要なる豈余輩の喋々を待たんや。心理學の書固より乏しからず、然れども催眠術用の心理書としては好著書未だ多からず。本書は固より其完全を盡したるものにあらずと雖ども、初學者之によりて催眠術真相暗示の奥儀を曉り亦以て心理研究の端緒を開く導火線たるを得ば著者の幸之に過ぎざるなり。

著者識す

目次

(一) 目次

第一章 心理研究と催眠術……………一頁
暗示法を有効ならしむる筈——心理研究の方法。

第二章 身體……………六頁
身體の構造——運動系統——消化系統——循環系統——呼吸系統——神經系統——腦髓及腦神經——脊髓及脊髓神經——交感神經。

第三章 精神……………一八頁
精神の本體——精神の現象——精神現象の三狀態——精神現象の根本。

第四章 身心の關係……………二二頁
身心相關の二種の事實——身體と精神との關係は何故に生ずるか——身心一如——四大——五蘊——四支五根——三十六物——十二因緣。

第五章 メスメル現象……………二八頁

第 六 章

メスメリズムの現はるゝ最初の現象——通常覚醒状態に在つては決して得られざる現象——アレ
ードの最初及晩年の兩原理の相異。
エテイリツクカ——メスメリズムの治病上に及ぼす作用——メスメリズムの現象を發する原因——
メスメリズムの治病上の効能——疼痛と熱と血液循環との關係——メスメリズム感傷の必須
の要素——動物の有する自然的治病の本能性——メスメリズムの太古より印度に於て行はれて居
つたこと——ジャツアラの治療——シャーフンク——シャーナアと摩撫——フンカアと煦氣
——マタボン——紫檀製の念珠。

關するブレードの所論

三七

第 七 章

催眠状態の表はるゝは生理的原因に關す
といふブレードの所論

四〇

神經中樞の麻痺と、レグエタ筋の疲勞——アレードの催眠法——アレードの最初唱へたる原理の
梗概九ヶ條——アレードの興味ある觀察——冷き空氣を通ずる方法——四肢を柔軟になす方法
——半身の活動半身の麻痺——催眠現象に關し世に公にしたるアレードの意見——白痴のもの
の催眠——盲目者に催眠せしむ。

第 八 章

催眠現象は心の凝集状態に因つて現はるゝは心理的原因に關す
といふブレードの所論

五一

催眠現象は心の凝集状態に因つて現はるゝ——アムネシアを伴ふものに於て眞の催眠状態を惹起す
——暗示が催眠状態に在つて一層猛勢なる力を顯はす理由——暗示に依つて初めて生ずる觀念は
恰も機關師の如き働を爲す——催眠状態は被術者の體内に於ける神經力の分配如何に因る——
の官能のみ直に動作する理由——暗示最良。

第 九 章

磁石の魔力

五九

倫敦の一醫師とアレードとの魔術競べ——パーキンス治療法——暗示の力が身體の作用に及ぼす
變化の實例——密閉した管中の藥材の力——暗示に依つて喚起せられたる觀念は、或は興奮劑と
なり、或は鎮靜劑となつて働く——暗示の作用を證明するホモパシー療法——普通治療に於ける
藥劑の功と暗示の功と——骨相學的暗示。

第 十 章

催眠現象生起の最も有効なるもの

六九

暗示の際の音聲の變化と其結果——パツス法及其他の生理的方法の説明。

第十一章 催眠術の危険といふことに就いてのブレ

ードの論……………七一

貞操な婦人が催眠中に不徳漢の犠牲となるか否か——催眠術に危険の伴ふ虞がないといふ理由の要件四箇條——麻酔薬の危険なる二つの事實。

第十二章 ブレード催眠原理の結論……………七四

印度の托鉢僧の行る長時間の失神——前後相異せるブレードの三説——ブレード晩年の學說の概括。

第十三章 催眠の特質に関するベンネツトの論……………七八

束縛を受けぬ優勢な觀念——生理現象心理現象の交渉。

第十四章 近世催眠術學說、チャーコツトの説或は……………八一

サルベトリ派の説……………八一

(一)イ、催眠はヒステリ性の人に起し得べき病的状態なりや否や——(二)ロ、果して婦人は男子よりも懸じ易いか——(三)ハ、果して兒童と老人とは催眠術を感じないか——(四)ニ、催眠は機械的方

法のみで惹起し得るものなりや否や——(五)三、催眠現象は三個の特殊状態に分ち得るか——(六)四、果して催眠術に醫學的價值なきか——(七)六、或金屬磁石其他の無生物を接し又は近けて種々の生理的並に心的現象を惹起し得るか否か。

第十五章 催眠現象に関するハイデンハインの説……………九二

神經流通の簡便循環説——催眠は少しの外周の刺激がなうても起し得らる——催眠は中心刺激で起る——覺醒後に催眠中の事を記憶して居ないといふ一事に基礎を置いた説——深い催眠に陥るべき記憶消失も暗示で之を防過することが出来る。

第十六章 バツスに関するブレード及びフォーレル……………九八

の意見……………九八

身體の感觸より生ずる兩結果——被術者の面を吹く原理。

第十七章 暗示の原理と觀念聯合……………一〇〇

暗示の基礎——第一節、觀念の起狀及び意識界無意識界——夢、通常状態、催眠状態の比較——第二節、觀念の再生及觀念の聯合——第三節、觀念再生を容易ならしむる事項——催眠術に於て暗示反復の必要なる理由——第四節、暗示命令の概要——第五節、催眠状態に於ける暗示受容の傾向——催眠状態に於ける暗示の結果と通常状態に於ける暗示の結果——催眠状態に於ける

第十八章 注意と催眠術

第一節、通常状態の注意と催眠状態の注意——意識の占領——強力猛勢なる影響を生理的方面に及ぼす理由。——第二節、催眠状態の惹起に要する注意——催眠状態を容易に惹起する二原因——通常睡眠及催眠の生起する原因——注意と催眠状態惹起との間に存する關係。——第三節、注意の凝集は催眠状態を生ずるの原因となるか——新なる觀念に對する注意の變化。

第十九章 ラボート及注意

ラボートに関するリエポールの説——ラボートの現出する原因——ベルンハイムの説——催眠状態の注意に関するアレードの説明——被術者は術者以外の暗示をも聞く——ラボートに關してベルンハイムとリエポールの説の異同——ラボートに關するフランウエルの觀察——ラボートの現はるゝ原因に就いてのモールの説——睡れる母親と其嬰兒との間のラボート。

第二十章 氣質と催眠術

氣質の性質——氣質の原因——氣質に關する研究——氣質の種類と感受性との關係——氣質の種類と催眠感受性との關係——氣質と配偶との關係——氣質と年齢との關係——氣質に對する催眠術上の注意。

第二十一章 記憶と催眠術

記憶を完全にすることに必要なる條件——催眠術に依つて記憶のよくなる理由——記憶術の秘傳——催眠の記憶減衰に關するベルンハイムの説明——覚醒状態及催眠状態に於ける神経力——暗示によつて記憶を左右す。

第二十二章 幻覺、夢、及錯覺と催眠術

幻覺暗示の注意——幻覺の原因——幻覺を起す感覺機關——無催眠状態中に現はるる健全なる人の幻覺——錯覺的の夢——垂仁天皇の夢——幻覺的の夢——心像と知覺との關係より生ずる特種の現象——パルチツク艦隊北海の狼狽——錯覺の應用——錯覺を現はす感覺機關——幻覺と錯覺との區別——錯覺の種類——所動的錯覺——能動的錯覺。

第二十三章 感情と催眠術

人間は感情の動物なり——感情事情に對する催眠治療の必要條件——催眠感受性と感情——女子が催眠に感じ易いと想像せらるゝ一理由——女子と感情——感情の表出と催眠状態——人間の説明——顔容と感情の關係。

第二十四章 意志と催眠術

意志に關する一般心理——意志の強弱と催眠感受性——意志の記憶と催眠感受性——催眠状態

と意志——催眠状態中の良心——ブレードとナンシー派との意見の相異——フランツェル氏の批評的説明——自動機械的の動作——催眠状態に於ける自動機械的の犯罪——催眠状態の被術者は術者の暗示によりて、普通覚醒状態の意志に乖反せる所の犯罪的行為又は他の動作を遂行する否か——催眠状態中の最も驚くべき特色——催眠中の精神現象に関するフランツェルの實驗——齒を抜く事を拒む——義齒を嵌めること出来ないといふ暗示に動かさる——羞耻の情より腕を捻る暗示を拒絶す——巧なる記憶が出来た——を喫する暗示を拒絶す——異端の説教者と魚賣となる暗示を拒絶す——朋友毒殺の暗示——懐中時計竊取の暗示——催眠状態中の氣持——催眠状態に於て自己暗示奏効の證明——催眠前の暗示の結果——覺醒状態に於て拒絶すべき事は催眠状態に於ても亦拒絶す——暗示奏効の成否に影響する事情——暗示奏効の最良法——暗示は生理的變化なくとも或徳性上に特別な變化あるものなりや——催眠状態の婦人に裸體暗示をなして奏効す——裸體暗示の奏効せざる場合——催眠状態に於ける被術者と、通常状態に於ける被術者との相違——催眠状態に於ける犯罪の原因——絶對的服従と絶對的反抗と——睡眠状態の者の容易に受容する暗示事項——被術者が暗示を拒絶する理由。

第二十五章 自動機械的現象の生起に於ける術者の感化…三〇二

催眠現象の表現に關して最も緊要なるもの——ベルンハイムの説——フランツェルの説——
 (一)催眠現象の惹起に關して術者の最も大切な要素を故らに輕視せんとしたる場合——服従心を増さしむる事情——術者の干渉なくして被術者に催眠状態及其現象を喚起せしめんことを教へんと試みたる場合。

催眠術心理全書

熊代彦太郎著

第一章 心理研究と催眠術

教育といふものが、精神上的の交渉問題であるが如くに、催眠術といふものも、亦精神上的の交渉問題である。されば教育者に取りて、心理學の必要なるが如くに催眠術者に取りても心理學の必要なること、亦固より言を待たざる所である。教育には教育術といふものがあつて、心理學の原則に準據せざるを得ざるが如くに、催眠術には暗示法といふものがあつて、心理學の原則に従はねばならないのである。之れを要するに催眠術の秘訣といふものは、如何なる被術者に對しても、此暗示法を有効

ならしむるといふことである。而して暗示法を有効ならしむるには、如何いふ策があるといふに、先第一着に催眠の原理を知らねばならない。尤も催眠原理といふものは、心理學上の原則に基いて成立つて居るものであるから、催眠原理を知るには同時に心理を研究する必要が促がされて來るのである。

心理を研究するに、如何いふ方法を以てすればよいかといふに、思辨といふこと、観察といふこと、實驗といふこと、が必要である。併し思辨と言つた所で、たゞ空に考へたばかりでは何の役にも立たない。荀子といふ人が嘗て言つたことがある。それは何かといふに吾嘗て終日思辨して見たが、須臾の間學ぶのには及ばないといふことである。荀子は人に學問を勸むる爲に、即ち讀書するやうに、斯う言つたものであるが之れは心理研究の上にも無論應用が出来る。吾人が自分で色々考へるよりは、先手取早く東西の諸大家が著はされた書物を讀んで見るといふことが、第一捷徑である。が又此の書物を讀むにも空に讀んでは其効がない。何でも思辨を加へ

て、注意して讀むといふことが肝要である。

心理書を讀むと同時に必要なことは観察である。観察といふのは精神現象を事實に依つて察知すること、例へば喜ぶ時は、如何いふ容貌を生ずるか、怒る時は如何いふ顔色を現はすかといふやうなことを観察するが如きをいふのである。而して此の観察といふには二様の場合がある。一は主観法と言つて、自分の心の有様を観察することである。我が思つて考へて居ること、我が感じて居ること、我願望する所の事も最も能く知ることが出来る。或事業に就いて如何なる思想を起したか、或境遇に際會して、如何なる感情が発生したか、或事物に出逢うて如何なる願望を生じたか、我明に之れを知ることが出来る。然れども吾人は自分の心に對して、屢々間違つた観察を爲すことがある、而して其の間違ひ易い原因は、観察するものも、せらるゝものも、均しく我が心であるといふこと、喜怒哀樂の盛なる爲、我が判断が之によりて迷はせらるゝといふことである。甚しく喜びたる時、又は激しく

怒りたるときは、我心に對して明かなる觀察を爲すことが出來ない。心こそ心迷はす心なれ、心に心、心ゆるすなとある通り自分の心を知ることの時として困難なることあるは、何人も認むる所である。且つ又縦令完全に觀察することが出來たとしても、唯自分一人の心に過ぎないのであるから、一般に涉つた眞理を確むることが出來ない。是に於てか客觀法と云つて、他人の心を觀察するの必要が生ずるのである。而して他人の心を觀察するには、直接と間接との二様の場合がある。例へば彼の人は顔色が蒼白で何となく沈んで居る様子だから何か心配をして居るのだとか、此の人は大層にこゝろして居るから、何か楽しいことがあるのだとか、いふやうな工合に顔色容貌とか其他言語だとか、舉動とかに依つて、直接に之れを知ることが出來、又傳記逸事詩文等に依つて、間接に之れを知ることが出來る。以上の研究法ばかりでは、猶十分でない所があるから、近世に至つて心理的實驗を試みる事に爲つたのである。例へば或一つの感覺を生ずるには其刺激を、何れ程迄

に強めなければならぬか、又感覺の強弱の差異を感じるには、其刺激に於て何程の差異を要すべきかといふやうな事項を研究する爲に、實驗室を設け、之れに要する機械器具をも具備するといふやうに、研究を進めて居るのである。斯の如くに心理書を讀み、思辨を加ふると同時に、觀察を爲し、更に實驗を試みるといふやうな工合に、研究を積んで行けば、十分に心理を知ることが出來るのである。而して催眠術は、實に心理實驗の好方便となるものである。されば催眠術者は此の機會を利用して精密なる實驗を重ねて行つたならば、前人未發の心理上の眞理を發明することが出來るだらうと信するのである。勿論其此に至るには、術者は先十分に心理學を講究せなければならぬのである。吾人は之れより催眠原理並に催眠心理を説明せんとするものであるが、其前に先づ吾人の身體、精神、及心身相關の理、等の一斑を陳べて置かうと思ふのである。

第二章 身體

身體の構造 人の身體は、其外部の形状より分てば、頭部、胸部、及び四肢となり、内部の構造より分てば、運動系統、消化系統、循環系統、呼吸系統、神經系統となるのである。系統といふのは個々の部分相集り首尾一貫して全體を爲し其の間に井然たる秩序ある集合體をいふのである。

一 運動系統

人間の身體は一種の運動器械である。而して其組織と作用とは、精良なる機械と雖ども之に勝ることが出来ない。此運動機械、即ち運動系統に屬する機關は、骨節及び筋肉で、此二者各神經の支配によつて、百般の運動働作を營爲するものである。骨節は人體形成の基礎で、其の形状を保持し又腔竅を圍繞して、其の内に腦髓脊髓肺臟心臟等の柔軟な機關を包藏し、之をして容易に損傷させないやうに擁護して居

る。其數は大小共に二百十三個あつて人體の支柱となり、各部分をして固有の形状を保たしむるものである。筋肉は俗に肉と稱し主として人體の軟部を形成する紅色肥厚のものである。其形状大小長短は種々であるが、何れも兩端は白色で光澤ある弾力性の纖維によつて骨節に附着して居る。筋肉は其數殆ど骨の二倍以上あつて伸縮自在である。神經より傳りたる興奮に依つて、運動の起因を成るものである。運動は體熱を生じ且つ身體組織の交代作用を起す。之を譬ふるに人體は猶蒸氣機關の如きものである。其各部分はよく連結せられ且つ其活動と共に熱せらるゝものである。而して此熱力を生ずるには、之に必要なる燃料を供給せんければならぬ。此供給は機關の活力を支持し、併せて損失を償ふに足るだけの分量を要するものである。斯くて人體組織の交代作用所謂新陳代謝が行はる。此交代即ち新陳代謝は、血液の循環に依つて行はれ、血液は營養及び吸息に依り必要なる材料を收得するのである。

二 消化系統

蒸氣機關に石炭を供給する如くに、吾人の身體も其資料を供給せんければ活動を生ずることが出来ない。されば身體に必要な資料は、如何なるものであるかといふに、酸素、水、澱粉、蛋白質、脂肪、砂糖、鹽類、石灰、鐵、硫黃、磷等である。此等の資料は一部は吸息に依り、一部は飲食に依りて供せらる。然れども飲食物は、資料と成るに先ち、消化器中に在りて、脾液胃液腸液の如き分泌液の補助に依り、血液の部分となるに適するやう變化せんければならぬ。此の飲食物を血液に變化する作用を爲すのが即ち消化系統である。之に屬する機關は、齒、唾腺、食道、胃腸肝、脾等であつて、是等の機關は、能く飲食物を攝取して之を消化するの作用を爲すものである。而して其消化したるものは血管中に吸収せられ、全身體の各部に普く循環し、不消化物は體外に排泄するのである。

三 循環系統

飲食物が既に消化作用を受けて後は營養液となる、此營養液は即ち血液及び淋巴液で、血液を循環せしむべきものを血管と稱し、淋巴液を循環せしむべきものを淋巴管と稱するのである。

血液循環の中樞機關は心臟で、胸部に位して四房を有す。常に唧筒的作用を爲し、身體を營養する所の血液を全身に配付し、又全身の靜脈血、即ち其の老廢して不用のものとなりたるものを集めて、更に之を肺臟に送りて、新鮮ならしむる所の作用を爲すのである。血管は全身に満布し其細微なるものは、毛細血管と稱し、此處にて營養作用を營むのである。淋巴管は更に薄く微細にして、血管と組織との中間に立ち、營養作用と老廢物吸收作用とを營むのである。

四 呼吸系統

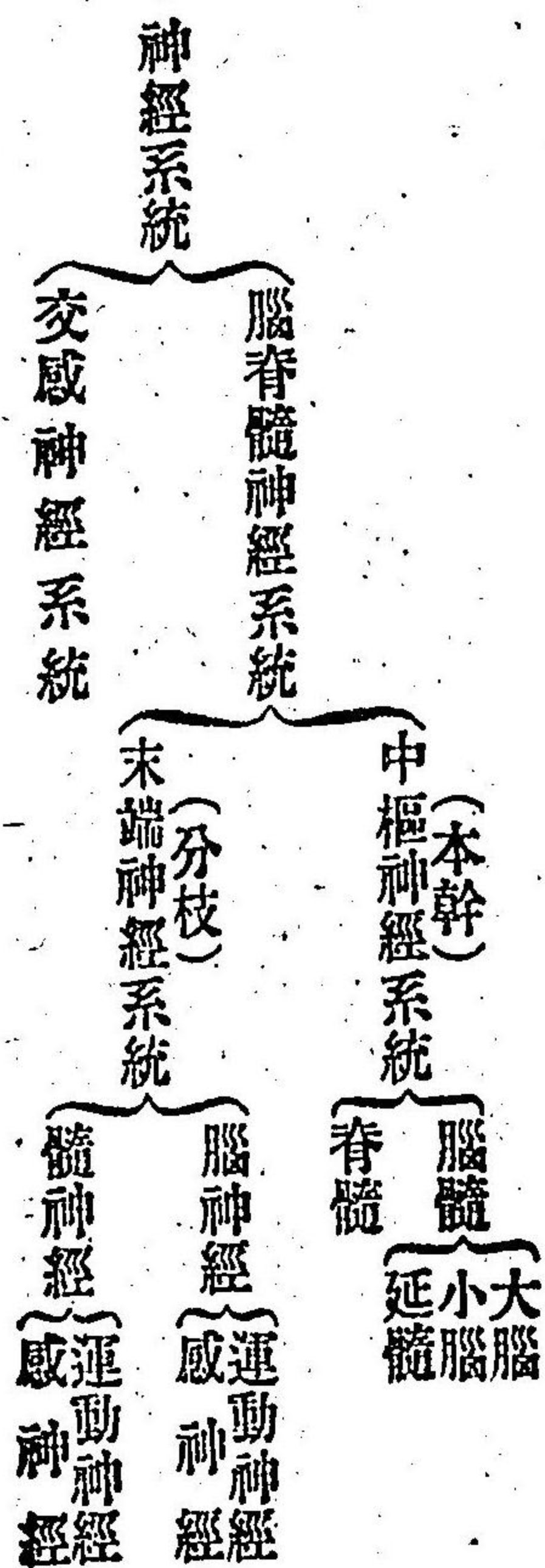
呼吸系統に屬する機關は鼻腔、咽頭、喉頭、氣管、及び肺臟等をいふのであつて、空氣を呼吸して、血液に酸素を與へて、營養に適せしめ、又炭酸氣を體外に呼出す

るところの作用を爲すのである。而して此中心機關は肺臓である。肺臓は胸部に位置を占め、左右の二大葉より成り、各葉は肺胞と稱する小囊に終り、此小囊の周囲には、血管の毛細網ありて被包して居る。呼吸作用は、各肺葉の自己の彈力と、胸壁を構成せる肋骨、胸腹間に存する横隔膜等の作用によりて、空気を呼吸するものである。斯くして肺胞部にて、血中の炭酸瓦斯と、空氣中の酸素瓦斯と交換をなし、靜脈血即ち暗紫色の血は動脈血即ち鮮紅血となり、又水蒸氣炭酸瓦斯は肺臟より呼出せらるるのである。又別に皮膚呼吸といふものがある。其れは皮膚に於て又瓦斯體を吸入し及び之を排泄する所の作用を爲すをいふのである。

五 神經系統

身體の各機關は神經組織に依りて統一せられて居るものであるが、此神經組織を神經系統といひ、人體全身の活動を主宰する最も緊要なる機關であつて、常に身體生

活の本源たるばかりでなく又實に精神作用の發動部即ち心意生活に直接の關係を有する所である。此の神經系統に二種ありて一を腦脊髓神經系統といひ、一を交感神經系統といふのである。腦脊髓神經系統は又之を別ちて中樞神經系統と末端神經系統との二となし、中樞神經系統は腦髓と脊髓とに別れ、末端神經系統は腦神經と脊髄神經とに別れ、腦髓は更に大脳小脳延髓等に分れ、腦神經と脊髄神經とは更に各運動神經と感神經(知覺神經ともいふ)に分れて居る。今之を表にて示せば左の如くなる



次に神経系統の構造及び其作用につきて、猶詳細に之を述べやう

神経系統は、神経細胞、及び神経纖維より組成せられて居る。神経細胞は、灰白色で其形は圓形楕圓形多角形等の諸種であつて、心身の活動につきて諸般の命令を發し或は外來の刺激を感受する有形的本源である。神経纖維は神経中樞より出づる線にして網のやうに身體に分布したる微細なる纖維で、其色は銀光燦たる帶黄白である。其の兩端は共に神経細胞と連絡することあり、或は其の一端は神経細胞に接し、一端は神経細胞に接し他端は筋肉等に移行することある。要するに神経纖維は一端に於て起る興奮を他端に傳達する爲のものであつて、恰も彼の電信線のやうなものである。左に神経系統の各種に就いて述べやう。

一、脳髓及腦神經

脳髓は頭蓋骨内に在る豆腐のやうな柔軟い物質であつて内部は神経纖維から成り、外部は神経細胞から成つて居るのである。前にもいへる如く大脳小脳延髓の三に分

れて居つて、大脳は脳髓の最多分を占め、左右の兩半球から成り中間に深き溝溝がある。小脳は大脳の後下方に位置を占めて、亦左右の兩半球より成つて居る。從來學者の研究の結果によれば、大脳は人間精神の發現する本部で心意生活の多くは此場所の掌る所である。次に小脳は全身運動の調節を掌る所である。又延髓は脳髓と脊髄との連絡する所であつて呼吸嚥下瞳孔收縮等の如き生活上樞要の作用は皆此場所の掌る所である。即脊髄よりも一層樞要なる反射運動を爲す所である。反射運動とは物を考へながら其兩足を使用して歩行するが如く、意志を待たず、感覺に達せずして、發する作用をいふのである。

脳髓からは、嗅神經、視神經、聽神經、等の如き十二對の神経が出で、頭部顔面等に分布して居る之を腦神經といふのである。

二、脊髄及脊髓神經

脊髄は脊柱骨内に在る稍扁平なる圓柱であつて、内部は神経から成り、外部は神経

纖維から成つて居るもので、上は脳髓に入り、下は全身に分布して居るものである。其作用は傳達と反對運動との二ツである。即ち一體の末梢部に受けたる刺激を脳髓に傳達し、又脳髓の命を受けて之を末梢部に傳達する所の働を爲すものである、所謂末梢神経部と脳髓間との傳達の媒介を爲すものである。又一は反射運動を爲すことである。即ち歩行の如きは此の脊髓の作用によるのである。

脊髓からは三十一對の神経を出し其神経は椎骨と椎骨との間にある孔隙を通過して出で、漸次に分岐して胴部及び四肢の諸部に分布して居る。

以上に述べたる脳髓及び脊髓は何れも活動の本源であるから、之を中樞部と稱し、又中樞部より出でたる神経は、此の中樞部から出づる指揮命令を筋肉及び諸機關傳達し、又筋肉及び諸機關の上に取りたる變化を中樞部に傳達するものであるから中樞部に對して之を末梢部と稱するのである。即ち前者は本幹で後者は分枝である而して末梢部即ち脳神経及脊髓神経は又各感と動とに別るゝことは前既に述べた通りである。

りであるが感神経の方は身體の各部の刺激を感受するところの作用を爲し動神経の方は中樞部から出づる命令を實行する作用を爲すのである。例へば茲に牡丹餅があるとき、之は牡丹餅であると知るが如きは感神経が先づ受け付けて之を樞部に傳ふるからである。而して牡丹餅を見て之を食ふが如きは、動神経が傳へたる中樞部の命令を實行するのである。

今此の脳脊髓神経系統に屬する諸機關の分掌について一の譬喩を引いて見れば、脳髓は一國の中央政府のやうで、脊髓は地方府廳のやうで、末梢神経は町村役場のやうである。町村より來る報告の中で、地方府廳限りのものもあり、中央政府に傳ふるものもある。又命令の中で中央政府から發するものもあり、地方府廳から發するものもあるやうに、末梢神経に受け付けたる刺激が、脊髓限りのものあれば、脊髓を經由して脳髓まで傳ふるものもあるし、中樞部から發する命令が、脳髓から出づるものあれば、脊髓から出づるものもある。花を見て美しと感じ、團子を喰べて、甘しと感ずるは、

脊髄が延髄を通じて、大脳に傳へたのである。が膝蓋腱反射と稱して、彼の脚氣患者が往々試みる一方の膝を一方の膝の上に重ねて、下脚を浮かせ、指頭を以て、膝關節を打ちて、下脚の撥るか撥ねざるかを試すが如き場合には、膝關節部の感神経は、刺激を脊髄の反射中樞に傳へ、こゝより直ちに動神経に命令を發したのであつて、脳髓に交渉せず、又其干渉を受けないのである。斯の如く運動神経は神経組織の中心に起りたる興奮を身體の各部に輸送するのであるが、其興奮脳髓から來るときは、之を有意運動といひ、脊髄又は次に述べやうとする交感神経節から來るときは、之を無意運動といふのである。

三、交感神経

交感神経系統とは、脊柱の兩側に並列せる神経節、及びこれから分出して居る、神経維の總稱であつて、胸腹腔内の諸臓特に心臓及び全身の動脈に分布して居るものである。其作用は胃心臓等の如き内臓及び血管の不隨意運動を掌るのである。こ

れは人が胃心臓等の活きを感じることに出來ぬやうに意識なしに活くものであつて精神作用には直接の關係がないのである、併しながら之によりて吾人は自己の身體の状態に關する知識を得、且健康病弱の感動を起し従つて感情的心調即ち感情の有様が變化するのである。感情とは一言でいへば苦しいとか楽しいとかいふことであるが、消化が悪いか血脈が能く循環しないとかいふ時には楽しい事を見たり、聞いたりしても、一向楽しくは感じない却つて煩く感ずる位である。ところが消化がよく出來、血脈がよく循環して、身體機能が健康で清々して居れば、感情が爽快である。

第二章 精神

精神の本體 精神の本體を論ずるといふことは、至極重大な問題である。而して是れを研究するのは、哲學の領分であつて心理學の領分ではないのである。心理學の役目は精神の現象を研究するといふことを引き受けて居るのである。精神の現象 精神の現象即ち心意生活の現象といふものは頗る複雑なものであるが、之れを大別して見ると、各特色を呈する所の三つの主なる状態があるのである。知性、感情、意志是れである。知性といふのは、知ることに関する一切の精神現象の總名である。例へば九段の遊就館に至りて、大砲を見て、茲に大砲があることを知り又此の大砲は我が軍が露軍より捕獲し來りたる戦利品であるといふことを思ひ起し、又其の大砲は容易に敵手に委すべからざる者であるのに、何故露軍は之れを我軍に分取られたのであるかと、推究して遂にそれは露軍が弱く我が軍が強き

に原因するものであると判断するが如きは、皆等しく此の知性の作用に屬するものである。感情と意志とは後章に説明するから茲には略するのである。斯の如く吾人の精神現象には知、情、意の三つの者が各特別の力あつて、別々に働くとはいふ譯のものではない、要するに一つの精神現象たるに過ぎないのであるが、其の發現の狀態が各特種の形を呈して居るから、假りに分けて三つとしたものである。而して吾人の精神現象の根本は何であるかといふに或は知が根本だといひ、或は情が根本だといひ、或は意が根本だといひ或は精神現象の根本は知でもない、情でもない、意でもない、觀念であるといふのである。而して現今の心理學者は誰でも此觀念説に同意して居るのである。即ち吾人の精神現象は觀念といふものが根本を爲して居るので、知といひ、情といひ、意といふも、何れも觀念といふ中に包括せられて居るのである。觀念の説明は後章暗示の原理と觀念聯合といふ條下に譲る。

- 心とはいかなるものかをいふならむ墨繪に背きし松風の音
- 二つある者ならなくに千々にさへ碎け易きは心なりけり
- 幾度の思ひ定めて變らむ頼むまじきは我心なり
- 飛躍たくみはめて作れる眞木柱立てし心は動かし難し
- 心こそ心迷はず心なれ心に心心ゆるすな

第四章 身心の關係

吾人の身體と精神とは互に相交渉して因果的關係を有して居るものである。即ち身體の強弱は、精神の強弱を來し、精神の強弱は身體の強弱を來すといふが如くに、茲に生理的現象あれば、必ず之に伴ふ心理的現象を生じ、心理的現象があれば必ず之に伴ふ生理的現象を生ずるのである。是故に身心の關係には二種の事實を認めざるを得ないのである。それは言ふ迄もない、左の事實を指すのである。

- (一) 精神現象が身體機關の組織及び官能に影響を與ふること、即ち心理作用が肉體に影響を及ぼすをいふ。
- (二) 身體機關の組織及び官能が、精神現象に影響を與ふること、即ち生理作用が精神に影響を及ぼすをいふ。

右の二種の事實が常に相錯綜して互に影響し呼應することは明白なる事實である。

而して其實例の如きは前に拙著催眠術全書第十三章催眠術によりて病の治る理由といふ條下にそれを擧げて居るから本書には之れを略して他の方面より、身體と精神との關係は、何故に生ずるかといふことを説いて見やうと思ふのである。身心相關といふときには身と心との二物が別々に存在して居るやうであるが、其實身心は原來二物ではない一物である。一物であるから之を離して別々に見ることが出来ない。其身といひ心といふも畢竟は同一物の兩方面を謂つて居るのである。物には表裏本末といふものがあるが如くに、人には心と身と互に表裏本末を爲して居るのである。而して其何れが本で何れが末であるかといふに、吾人は心を本とし、身を末として、假定して居るのである。身心相關の事實は當然の理である。而して催眠治療心理療法等の能く病を治し得られるのは此れに基くのである。心外和尚の法語に曰く、一切の諸法は皆一念より生ず。花の開くを見て實を結ぶが如し、念は亦心より生ず、枝葉あつて花の開くが如し、本性は何を以てか心を生ず、色空相應じて

來り亦相應じて去る。故に光をはなる、燈火なく、燈火をはなる、光なし、空をはなる、地水火風なく地水火風を離る、身なく、身を離る、心なし。空を離る、地水火風なく、地水火風を離る、空なし。故に四大相感じて身と化來するとき、空も化現して心となるが如く、石と火打と相合して火出づ、火出づれば光も共に生ずるが如くなり。亦死するも火の滅するが如し。故に地獄もなく、極樂もなし。古人云ふ諸の善法を起すも、本是れ幻、諸の惡業を造るも亦是れ幻、身は聚沫の如く、心は風の如し。云々

是れ實に身心相關の理を現はしたる名言である。
坐禪用心記にも亦身心の關係を説いて曰く

四大五蘊遂和合、四支五根忽現成、以至三十六物、十二因緣、造作遷流、展轉相續、但以乘法、合成而有。

是れは先吾人の身體の生ずる所以を説きたるものである、四大といふに内外の二種

がある。地水火風を外の四大といひ、堅濕燃動を内の四大といふ。大とは此の四つは到る處にあらずといふことなく、且つ其の作用極めて廣大なるものであるからいふのである。五蘊とは色受想行識をいふ。色は此の身の形質、受は領納の義で苦樂の感及び其他の感覺をいふ。想は想像のこと、行は造作遷流の義、識は識別と熟せる字にて分別のこと、即思想作用に當る。蘊とは積聚の義にて此の五が積み聚つて此の身を成す所より名けたのである。四支は左右の手と足とをいひ、五根は、眼耳鼻舌身の五が、一切の善惡の作業をなす根本であるから根といふのである。さて吾人の身體は此の四大と五蘊とが相結合して、手足や五根が現はれて出来るのである。夫れから身の内に在る皮、膚、血、肉、筋、脈、骨、髓、肪、膏、腦、膜の十二、身の外に在る髮、毛、爪、齒、眵、涙、涎、唾、尿、屎、垢、汗の十二、身の内と外との中間に在る肝、膽、腸、胃、脾、腎、心、肺、生臟、熟臟、赤痰、白痰の十二、これを三十六物といふ。又十二因縁といふがある。即ち無明、行、識、

名色、六處、觸、受、愛、取、有、生、老、死なり。前世に於ける最初の迷を無明といふ。前世に於ける善惡の作業を行といふ。其の業力によりて母の胎内に宿る氣息あり、これを識といふ。胎内に於て一分の心識と形質とを具するこれを各色といふ。其れから眼、耳、鼻、舌、身、意の六つが具はる之れを六處といふ。六處が具はれば胎内を出で生れる。生れて當分の間は、只寒熱痛痒等の感覺があるのみであるが、之れを觸といふ。漸次に長じて苦樂等を知るこれを受といふ。又次第に生長して五欲を生ずるこれを愛といふ。愛念が生ずれば必ず其物を求むるこれを取といふ。取着を起せば業を作りそれを未來に持ち越して往くことこれを有といふ。有に依て未來の生を受くるこれを生といふ。生あれば必ず老死あり、これを老死といふ。この十二が互に原因となり又原因を助くる縁となり、三世に亘りて展轉相續して止まぬ之れを十二因縁といふ。以上約言すれば吾人の身體は四大五蘊乃至三十六物十二因縁等の衆多の物が結合し

て始めて出来るものであるとの意である。

心如海水、身如波浪。如海水外無一點波、如波浪外無一滴水。水波無別。動靜不異云々

是れは身と心とは畢竟同一の物で二相の無い無別のものであるといふ理を説きたるものである。即ち身心の關係を海水と波浪とに喩へたものである。詰り此の心が海水であるとして見れば、この身は波浪のやうなものである。水はもと不動なるものであるけれども、風の爲に動くときは波をひき起し、水のとときは丸で違ふやうであるけれども、元來水を離れて、外には一點の波といふものはなく、又山の如き大波もその儘が水であれば、その波の外には一滴の水といふものはない。されば水と波とはその形に於てこそ違つて居るやうに見ゆるなれ。其の實體は決して別物ではない、但動くと静かなるときとによつて水と波との相違が出来るのみであるから、靜にして水であらうとも、動いて波にならうとも、其の實體に於ては毫も異なること

とはない。吾人の身心も其通りである。心はもとより不動にして澄み湛えたる水の如きものなれども前に述べた十二因縁といふやうな種々な縁に觸れて動くものである。而して身體に影響が及んで來るといふことである。約言すれば心をはなれて身はなく、身をはなれて心なしとの義になるのである。

第五章　メスマル現象

催眠術者即ち催眠術に従事する所の人は催眠心理を研究し、而して催眠術の原理を知る必要がある。催眠術の原理を知らうと思へば、先づ順序としてメスマリズムとは如何なるものであるかといふことを知らなければならぬ。エリオットソン及びエスデールの説に従へば、メスマリズムの現象は全く生理的より起るもので、乃ち人間の體中に或治病上の効を有する活流動體、換言すれば生理的特性の力、即ち或境遇の下に在ては甲の人より乙の人に傳ふることを得るといふ力の作用に基因するものであると想像せられたのである。而して普通此の力をエディリツク力と稱へて居て、各種の無生物にも此力存在して居て、メスマル状態を生せしめたり、又は其の現象を興起せしめたり、制止したり、或は變じたりなど爲すことが出来るものであると想像せられたのである。例へば或金屬は明白に硬直状態を生

せしめ、他の金屬は此の状態を變じて麻痺せしむといふ。縦へまたコップの如きものでさへも、メスマリズムを施す所の人が一度其上に氣を呼出すならば、デイツク力を其れに吹き込んだやうに思はれたのであつたといふことである。すべての人誰でも皆此のメスマリズムの感化を受くること容易であるといふ理ではないが、之れに感化せられ人を謂つて感覺鋭敏であると言つたのである。尤も其結果として諸官能の作用に新しき變化を來して、明に其の發達を見たことがある。例へばメスマリズムに感したる人が、暗中にて磁石を見れば、其磁石の兩極より光を發して、其光色一は消極より流出し、一は積極より流出したのを見たといふ。エスデールはメスマリズムの治病上に及ぼす作用を論結して左の如く言つて居る。

「天帝は實に慈悲深いもので、人間が病氣に罹つて、すべての技術的救濟法を失へる時に、他の健康なるものが、其の活力を分與して以て其の病者を救ひ得させやうといふ爲を慮られて、吾人人間の體中に他に類ち與ふることの出来る治病

的靈能の活力を賦與せられたものがある。是れ即ちメスメリズムが甲の人間に存する所の活流動體は乙の人體組織中に注入せらるゝことが出来るものであるといふ説の強ち無稽の言ではなくて、其間に或信すべきの眞理を見るのである。而してエスデールはメスメリズムの感應力は、二個の動物が、其の體系に於て、關係する境遇、又は状態に於て、甲の動物が乙の動物の上に活力を及ぼす一の生理的勢力で、メスメリズムの現象を發するの原因としては、神經の活力を著しく不遍に分配するに在るのだといひ、メスメリズムの作用たるや最初の状態に在つては、神經の興奮を生じ、次の状態に在つては、精神の錯亂を來して、或時は官能の著しく昂揚して心氣爽快なるが如き事あれば、或時は官能大に壓下して鬱憂なるが如きことがある。最後の状態に在つては、感覺の官能全く絶熄して皆昏睡病狀に陥ること宛も酒、阿片、印度芋等を用ひたる所の結果に酷だ似たるものがある。考へたのである、エスデール又メスメリズムの治病上の効能を論じて、左の如く言つて

居る。

「治病的何れの方法を論せず、若くは何れの藥劑を問はず、苟も人體に靈驗あらしめやうとするには、メスメリズムの如く、全く病的作用に非ずして、しかも人體の諸官能に、著大なる變化を生ぜしむる力を有して居らなければならぬ。凡そメスメリズムの如き、神經系統上に及ぼす感應力の鴻大にして、且つ危害なきものは如何なる醫療術を以て之に較ぶるとも、恐くこれに匹敵し得べきものは無からう。一度メスメル法に憑れる所の人々は、其の疾病を除却することが出来、而して其後に睡眠時間を長くして快く睡れることは、到底麻酔藥を用ひた後に伴ふやうな不快の感あるものとは同日にして論ずることが出来ないのである。抑も此の快き睡眠だけにても諸々の疾病を治し去るに足るだらうと。エスデールの觀察せる所に依れば、地方病的熱症及傳染熱の如きは、メスメリズムに依つて患者がメスメリズムの失神中に消失して、脈搏體温の平常に復するを見た

いふことである。後年に至りて、エスデールは、睡眠時を延ばす法に依つて、多く地方病的熱症の患者を癒したといふことである。而して其の成效に付いてのエスデールの説は大に興味のあるものである。即ちそれは疼痛と熱との關係を論じたることである。之に關してエスデールは説いて曰く、疼痛と熱とは、抑も痲衝を起すの原因たるものである。若し此の疼痛と熱とをして、或時間内に去らしむることが出来るならば、血液の循環、平常の均勢を恢復して熱症の歇むこと、宛かも石炭盡きて火の滅するが如きものである。エスメリズムを感傳する必須の要素たる暗示、豫期、想像も、エスデールに對しては、全く其の必要を見なかつたやうである。即ちエスデールはエスメリズムの如何なるものであるかといふことを少しも知らない者に對して、然も其術を施す前に豫め之れが説明をも與へざるに、屢能く施術出來たといふことを言つて居るのである。エスデールは被術者に向ひ、被術者が現はしたるさまの現象に付いて、説示すること出來なればかりではなく、エスデー

ル自身もエスメリズムの實驗を始めた時分には、其の現象を了解出來なかつたといふことである。

エスデールは、千里眼といふものを信じて曰く、エスメリズムの感化は或距離に於て行はれる、而して其の感化の由來する所の手段は、無生物に在るのである。

エスデールは又エスメリズムを感じたる患者は自己の疾病を治癒する悟性力と、治療の爲に自己を指圖する力とを獲るものであると思ひ、即ち此力こそ、動物の有する自然的治病の本能性として貴ぶべき所のものであれと思惟したのである。即ち犬が病氣に罹つたならば、藥草を喰ひ、雛が卵の殻を破つて、生るゝや否や、小石を啄むといふのも、皆此の秘密的の警戒者即ち本能性が指圖するのである。又之と同様に一般動物は營養物を撰んで食し、毒物は見えて之れを棄つるといふは此の本能的衝動に基くものである。斯の如くに睡眠状態に於ける治病の本能性は已知天來の知識を復活したるものであると考へたのである。

エスデイルはメスメリズムの太古より印度に於て知られて居つたことを確めたのであるけれども、メスメリズムの秘傳を傳ふるものは、或等級の家族にのみ制限せられたと信じたのである。即ちエスデイルは其の一例を示して謂へるには、嘗て東印度駐劄公使たりしドクトルデーヴキドサンが、カルカッタのメスメリズム病院を觀察したる時に助手が患者を摩擦したり氣を吹くを見て、彼れは始めて東印度の言語たるチャフンク (Jair-Hoohk) の意味は、メスメリズムと言ふに外ならぬのであることを了解したと言つて居ると。

彼れの患者の中で彼れが其疾病を治せしめやうとさまざまに苦心盡力しても甲斐ないものは、常にシャヅワラの治療を受けて不思議にも病の癒えたる事實を見て、彼れは大に驚き、如何して病癒しかを尋ねたるに各患者等は「チャフンク」といふ方法に依つて治療を受けたのであると言つたのである。されど彼れはチャフンクとは何の意味であるか、會得すること出来なかつたが、今メスメリズムを傳ふる人々が、

絶えず患者を摩擦し、且つ氣を彼れに吹くのを目撃したのである。即ちジャーナア (Janna) といふ語は、梵語で摩擦する意味で、フンカア (Fhonka) は煦氣するといふ意味であつてジャーフンクは正しくメスメル法といふ意味である。是に由つて之を觀れば印度に於てメスメル法の行はれたることを證することが出来るのである。ドクトル、トーポンは、アラカンより手紙を以てエスデイルに報じて曰くメスメリズムは、アサマ州民特にミヅス人民間に太古より盛んに用ひられて居る。又アサム人はバツスをなす體の部位に依つて名を異にして居る。即ち頭痛を癒す爲に用ふるバツスをマタポンといひ、而して長く行ふバツスを東印度語のチャフンクといふ名稱を用ひて居る。

ボンベイ軍隊の大佐バグノルドは、メスメリズムのボンベイに盛に行はれて居ることを叙べて左の如く言つて居る。

パリールドは或巡禮僧が、メスメル法に呪咀と一種の宗教的儀式とを交へたる術を

以て、一婦人に施術して居るのを觀たのに、紫檀製の念珠を以て被術者の眼前に之れを視させて後、念珠を以て被術者の頭から下方へバツスを爲し、時折はバツスを停めて氣を吹き、又は手を婦人の胸部に當つるのである。斯くの如く扱ふ間に婦人は睡氣を催し來て遂に眠れるを實驗したのであると。

第六章

メスメリズムと、催眠術との原理の相違に關するブレードの所論

ブレードは、初めにメスメル現象を見て自己を欺くより起る結果であつて、謂はゞ一の詭計たるに過ぎないと思爲して居たが、後年に至つてメスメリズムの大部分は、事實であつて、決して偽りではない、唯一般世人には誤解せられて居るのであるといふことを知つたのである。即ちブレードは注意を凝らして實驗と研究との効を積みみて、メスメリズムの生理的現象としての止動病狀的筋肉の硬直状態の如き或は心理的現象としての手術中疼痛を感ぜざるが如きは皆事實であることを確めた。猶又其の他普通に世の疑念者がメスメリズムの虚偽たることを示す唯一の證據なりと見做す現象の中にも、十分信すべき眞なるもの尠く無いといふことを述べて、メスメリズムの感受者は磁石の兩極より火の流出するを見たとか、或は千里眼の力を得

じたのである。次にブレードの兩原理の概要を述べやう。

たとかいふが如きことは、誣言に過ぎないのであるが、一部を見て全斑を毀すは事實惜むべきことであると言つて居る。ブレードはメスマリズムの現はる、最初の現象は、視覚の眩惑で、全く自覚なき暗示に依つて生ずる所のものである。同様に最後に現はる、現象はメスマル状態、即ち催眠状態中に生ずる特殊感覚の (Hypnotic-esthesia) を示すのである。之れあるが爲に被術者は、術者或は傍觀者の暗示を容るるのである、而して是れは、尋常覺醒の状態に在つては決して得ることの出来ないのであると説いて居るのである。そこでブレードがメスマリズムを否むを主として其の原理の上に就いての事である。ブレードの原理の基礎たる主要の點は催眠現象の現はるゝは、一に主觀的であつて術者の有する神秘的力とか或は活流動體とかの如き客觀的に基くものでないといふのである。

又ブレードは自ら己の原理を異にして居るのである。即ちブレードの最初に論じたる原理は生理的より論じたのであるが、後年に至りては主として心理的方面より論

第七章

催眠状態の表はるゝは生理的原因に

關すといふブレードの所論

ブレードは、メスメル状態の、物を凝視して生起することを観察して、目を開いて居ることの出来ないといふことは、神経中樞に麻痺を生ずると、レヴェタ筋の疲労を生じたるが爲に起るのであると考へ、メスメル現象は、凝視、生理的、休息、注意、及び壓迫呼吸に依つて、神経纖維血液循環、呼吸及筋肉の組織中に生ずる機能的變化に原因するものであると思惟したのである。即ちブレードはすべてメスメル現象の現はるゝは、生理的事情と心理的事情とに關係するものであつて、決して術者の意志にも、又は術者に有する磁流を傳ふるの力にも基つてなると確言したのである。

今日催眠術の用語として用ふるヒプノチズムといふ言辭は、ブレードがメスメリズ

ムといふ言辭の代りに創めて用ひたるより出でたものである。

初めブレードは、或光輝ある物體を用ひて、被術者の額の上に被術者が之を見て眼及び眼瞼に疲労を來すべき位置に支へ、之れを被術者に視させ、同時に心を此の物體の觀念にのみ固着せよと告げて、催眠状態を惹起せしめたのである。ブレードは此の機械的方法を用ひて、生じたる催眠状態は純粹なる主觀的催眠状態を惹起せしむるのみならず、未だメスメリズム若くは催眠状態を一聞したることなく、又豫期すべき所のことも知らないものに、催眠状態を生せしむることの出来ることを言つて居る。

ブレードの最初唱へたる原理の概略を示せば左の如くである。

(一) 續けて心を一點に凝集すると、視覚を凝集するとに依り、神経系に一の新状態即ち催眠状態を惹起せしむ、而して此の状態に現はるゝ現象は、普通の睡眠又は覺醒中に觀るものと、大に相違ありて、此の現象を生せしむる方法を異にするに従つ

て、現象もさまざまに異つて居る。

(二) 催眠状態中最初に視官を除くの外、特殊感覺の官能は何れも筋力を増加して、作用の興奮をなすのである。最後に此等感覺魯鈍になること、普通睡眠中に生ずるよりも甚だしいのである。

(三) 催眠状態中、術者は被術者の神経勢力を支配し得るのである。即ち術者は之を一部分若くは全般に興奮せしめたり或は壓下することが出来たりするのである。

(四) 催眠状態中に被術者の心臓力及び脈搏の鼓動を變せしむることが出来る。又血液の循環を制することが出来るのである。

(五) 是等と同様の感化を筋肉組織上に生せしむることが出来るのである。

(六) 毛細血管の血液循環にも又は身體中の排泄物及分泌物に急劇なる著しき變化を生せしむることが出来るのである。

(七) 催眠術を用ひて、一般醫術に依つて治せざる疾病を全治することが出来るのである。

ある。

(八) 催眠術の手段に依つて、亦外科手術の疼痛を防示することが出来るのである。

(九) 催眠状態中に被術者の頭蓋及び顔面を、手作して或る心理的現象と及び生理的現象とを興起せしむることが出来るのである。而して術者の手を觸る、部分に依つて、異なつた現象を現はすのである。

催眠状態を惹起せしめたる後、ブレードは筋肉系統と血液循環系統とに異狀を生せしめんが爲に第一着に生理的方法を用ひたのである。彼は之に依つてさまざまの催眠現象を生じ、疾病を治することを得たのであると信じたのである。然れども疾病の治療は催眠状態に在らずとも、普通覺醒状態に於ても此の法を用ひて、効果あるのであると言つて居る。ブレードの催眠状態を惹起せしむる方法に就いて考へて見るに、ブレードは、言語暗示法を用ひしことは明かであるけれども全く無意識的に、即ち其の價値を知らずして用ひたのである。

ブレードの興味ある多くの観察の中で、二三を示して見やうに、ブレードは冷き空気を通ずる方法を以て催眠状態を覺醒せしむることが出来たのである。又硬直状態を呈して居る四肢の上を呼氣して柔軟になすことが出来、又一方の目を同様に呼氣して、視覺を恢復せしめ、他の目を猶無感覺に閉ぢしめ置くことが出来たといふことである。ブレードは又體軀の半部分を興奮せしめて活動せしめ、他の半部分を硬直にして麻痺せしめ置くことが出来た。又は被術者をして特殊感覺の官能の一般不活潑なる状態より反對に著しき可動性状態に、即ち容易に神經興奮せしめ得て、感覺を鋭敏ならしむることが出来たといふことである。ブレードは此等異常の現象の何たるかを了解することが出来なかつたけれども、此等の現象を再現せしむるに於ては困難を感じたことがなかつた。即ち此等の再現現象は術者と被術者との間に何等の精神的關係を有するものではなうて、全く獨立的のものである、而して縦へ口より空氣を通じ、或は手の作用で以て風を生せしめ、若くは風櫃を用ひても、

其他様々の機械的方法を以て之に襲撃せしむるに拘らず、常に出現せしむることが出来たと言つて居る。催眠現象の生ずる原因は主観的であるといふ説は決して新しい説であるとはいはれない、既にフアリヤ及ベルツロンの二人は之を陳べて居たのである。然れども此二人の説は全く世に遺忘せられたといふ譯では無けれども、メスメリズム原理を説く上に於て餘り勢力ある説でなかつたのである。而してブレードもメスメリズムの研究を初めし頃は、彼等の説を知らなかつたのである。其れ故にブレードの説は全く其當時一般に世に行はれし此等の説とは大に趣を異にせる所あつて、獨識であり、一層成效せるものであつて、遂に前者に代つて世に稱道せらるゝに至つたのである。後ブレードの反對者が彼れの説と、前者の説との間に相似寄りたる點ありとして、之を指摘して論ぜし時に、ブレードはフアリヤが萬物は思想の結果に歸するものであると謂つたやうに、此れは事實よりも明瞭であると謂つたのである。即ち此の點

に關しては、彼等の説に互に相違して居るのである。唯觸接とか滋氣とかいふものは、必要を認めないのであるとは、彼等の與に等しく論じたる所である。ブレードは催眠現象は、被術者が自ら定めたる目標に對して注意を凝集する所の結果であるといふことを信じなかつたのである。ブレードの意見として世に公にして曰く、催眠現象は體の諸部に強く注意を指し向けられたる結果であると。其れ故にブレードの催眠術の方法は、體の外面の或物に注意を固定せしむるといふ條件に基いたものである。

催眠術は幻想に似たものであるといふ説に反對して、ブレードは曰く、幻想は腦の異狀安靜より生起するものであり、又精神不活潑なるが爲に心を一點にのみ強制的に指導すること出来ないより生起するのである。又注意を一物に凝集すること出来ず、却つて千々の物に散逸する所の缺點があるのである。然れどもブレードの催眠方法に依つて生じたる所の點の幻想といふものは、被術者の注意を一の觀念の上に

のみ働かせ、一物の上へのみ視覺を注ぐことが出来るものをいふのであると。

初めブレードは大に骨相學の必要を感じたのである。以爲らく骨相學を知れば、催眠状態中に頭及顔の或部分に觸るゝか、又は摩撫して戀愛とか、感情とか、或は智力の活動を刺激することが出来るだらうと。即ちブレードは十二人に付いて試験的に研究したる中にて、被術者が骨相學に付いて無學であり、初回の催眠術に於ては、催眠状態に感化せざるもの、若くは問答により暗示に依つて催眠状態に誘導すること出来なだものに於て、此の現象を観察したと述べて居る。然れども催眠状態を現はせる被術者が術者の與ふるすべての暗示若くは兆候を感受せんとの懸念よりして、著しく馴致し易き性（即ち柔順性）を表はすが爲に、其間に誤りを生じ易きことは免るべからざる事實であると認められたのである。即ち此の理に依り、或は他の理由に依つて、ブレードは自分の得たる結果を信するに足らざるを見てブレードは此現象を随意的觀念聯合に依つて、何れの程度まで實行することが出来るか、或

は又同じ頭の部分に觸れて、反對の現象を鼓舞誘出せしむることが出来るかと確めやうが爲に、更に新患者に付いて、新しき試験を爲て見やうと思ふのであると、謂ふに至つたのである。彼れは此等の試験に依つて觸接せる部分と現象の生起との間には、如何なる必須の關係あるべきか、又は現象は全く骨相學の幾分を識つて居るから、或は任意の秩序から、或は遺忘せられて居たる偶然の事情から生起する所の觀念聯合に屬するものであるかを確むることが出来るのであると考へたのである。ブレードがさまざま異つた方法を用ひて、催眠状態を惹起することが出来るか、否かを確めやうが爲に成したる試験の結果は、第一に其の催眠術原理に一の變化を與へたこと明白である。即ちブレードは催眠現象に關して純然たる生理説明を信據せる所の念を弛めたのである。初めブレードは被術者に或一定動かざる物體を被術者の眼瞼が自然に閉づるに至るまで、凝視せしむる法を用ひたのである。然れどもブレードは數次此の法に依つて、目の疲勞と、苦痛と或雜念とを伴ひ易く、而して之

を避けやうが爲に早く閉づるといふやうな種々の不都合を實驗したのである。然れども之あるに拘らずブレードは容易に催眠せしめ、其の結果に於ても不愉快なる兆候は少しも無かつたのである。猶ブレードは研究を積みたる後に、若し被術者の目が一物を凝視し心と體とは絶體的に安靜を保つならば、暗中に於て容易に催眠せしむることの出来る如くに、光明中に於ても亦催眠せしむることの出来るといふことを研究したのである。又白痴のものを催眠するには長き忍耐を要し、小兒に催眠せしめしに常に失敗に歸し、又智力の薄弱なるもの、及び心の燥急にして激動し易きものは催眠すること出来難いといふことを實驗したと言つて居るのである。又盲目のものに催眠せしめた事實により遂に其の説を被術者の受くる印象は、直接に心意に現はるゝもので、決して視神經を通じて現はるゝもので無いと認められたのである。ブレードは又數回催眠状態を表現したことある者ほど、容易に催眠状態を惹起する事實を観察して曰く、是れ全く觀念の聯合律より即ち想像の作用に因つて

生ずるものである。例へば若し被術者が何が自分を催眠せしむる所の事を、身に受けて居るのであるといふことを信するならば、縦令其施術せらるゝ所の事柄を目標せないでも、催眠状態を惹起せしむることが出来るのである。然れども若し被術者が術者の爲す事柄に無感覺であるならば、如何に熟練なる催眠術者と雖ども、之を催眠せしむることが覺束無いのである。

第八章 催眠状態の表はるゝは心理的原因に 關すといふブレードの所論

既に述べたる如くに、初めブレードは催眠現象の現はるゝは一に生理的原因に關するものであるといふことを論じたのであつたが、後には之に反してすべての催眠現象は心の凝集状態（モノイデイズム）に因つて現はるゝこと、及び此の現象の現はるゝや睡眠に似たる深い催眠状態中に現はるゝのであるか、若くは普通覺醒状態と殆ど區別なく、唯暗示を受容することが出来るといふだけ相違して居るといふ、淺い催眠状態中に於て現はるゝものかを説き初めたのである。而してブレードは初めてヒプノチズム（催眠術）といふ語を用ふるを以て、大なる非難を蒙るだらうと思ふたのである。即ち催眠にはさまざま多くの状態を含むが故に其中で最も睡眠に似たる状態に移るもの、及び覺醒してアムネシア（記憶消失即ち催眠状態中の出來事を覺

醒後に記憶せざることを伴ふものに於て、眞の催眠状態を惹起するのである。催眠術に依つて疾病を慰め或は治したる人々の中で、此の状態に達したるものは十分の一に過ぎないのである。されば、催眠てふ語は、其語義に含める状態を生ずることとは、如何なる方法に依つても、其の効無きものと思はしめたのである。そこでブリードは催眠てふ語は人工睡眠で、覺醒してアムネシアを伴ひ、又其の睡眠中に失ひたる記憶が、後の催眠状態に活動するといふ場合にのみ限つて正當に適用することが出来るのであるといつて居る。

とにかくブリードはメスマリズムてふ名稱を更へて、ヒプノチズムてふ語を用ふるに至つたのである。是れ後者の方が遙に前者よりも適當であると考えたからである。ブリードは初め催眠現象と見做したる状態は、すべて心の凝集の結果であることを認め、普通催眠術に用ふる方法として、實物の上に或は想像上の物體に注意を凝集することや、注視することは、すべてモノイズムを生ずるの傾向あるものである。

ると謂つて居るのである。

外部から獲たる印象の結果として、言語暗示に依るか、若くは生理的感觸の孰れかに依つて、人は通常状態に在つても、身體の或部分に、若くは官能の上に注意を固定することが出来、或は又他の暗示により注意を喚び戻すことをも出来るのであるが、催眠状態に在つては、斯かる暗示は一層猛勢なる力を顯はすのである。是れ此の状態に在つては、通常状態よりも注意を凝集する力一層強く、被術者の想像信仰及び豫期に依つて暗示の感應を輔くること夥大であるからである。斯の如き方法に依つて優勢なる觀念を發作し、觀念は身體の上に再現して、生理的作用を興奮せしむるに至るものであるとブリードは謂つて居る。

ブリードの言に従へば、鳥が蛇に魘れられて蕪惑し傳氣法に依つて現はるゝ現象、机廻(邦俗の狐狗狸と稱するもの)の現はるゝ現象、魔杖(地中の水脈又鐵脈を指示すといふ)ラツターの磁石力を度る器の移動の如き類は、占權力ある觀念より生

する自覺なき即ち不隨意筋の動作用たることを示す好適例である。若し或觀念が擧動の上のみ活動して、注意力を奪ひ去りしならば、一流の神経力筋肉中に注ぎ以て相當の運動を生起するのである。而して其の運動たるや、常に自覺ある努力に由るといふのでないのみならず、往々意志に反することがある。此の故に被術者は此占權力ある觀念を偏頗ならしむる所の勢力を失ひ、而して現出せる印象の性質によりて牽き寄せらるゝを抵抗することが出来ない。又妖術に封じ込められて抵抗出来難くなるのである。斯の如くにして聽覺暗示、視覺暗示、及び觸覺暗示の手段に依つて、被術者は他の支配を受くるに至ることが出来る。

催眠状態を惹起せしむる爲に、何如なる催眠方法を用ふるも催眠状態に現はるゝ心理的及生理的の二現象は全然占權力ある觀念より由來するものである。即ち此の觀念が催眠前被術者の心中に豫め存せると、術者の暗示を受けて後に生じたと、其存在の如何には少しも關係しないのである。其の術者の暗示に依つて初めて生ず

る觀念は恰も機關師の如き働きを爲すのである。即ち被術者の諸機能中に潜める活力をして、身體上に及ぼす心意の發動を支配する、一の法則に一致せしめて、之れを制御し且つ命令して以て活動を督促するのである。ブレードは全く催眠状態の特質たるすべての現象は被術者が睡眠に類似せる状態に移らないでも、猶表現し得るのであるといふことを信じて此の事に關しては、其の精神集中論に説示して居るのである。ブレードは以爲らく催眠状態は主にも主觀的のものであつて、被術者の體內に於ける神経力の分配如何に因るものである、換言すれば生理的機關の上に及ぼす精神作用の感化より生起するものであつて、メスマルの所謂甲の者より乙の者に、一種の不可思議なる感化を傳送するものにして、直接間接の暗示は兩とも大部分は奏効するのであるといふものとは、全く相違せるものである。然れども暗示の感化は、一に被術者の精神に挑撥せられたる觀念に屬するもので、之が爲に術者に有する感傳電氣力を消失する譯でないのである。若しメスマルの論じたる所のものが眞

理ならば、説教者や、著述者は、其の説教により、其著書によりて感化せられたるもの、人数に比例して説教著述者の有する活流動體の幾分を消失すべき道理である。勿論斯の如きことは、理に戻りたるものである。如何となれば、著述家の遺稿も、讀者に新觀念の暗示を與ふること、著者の存命中出版せるものと同様の感化を與ふることが出来ないといふいはれないのであると、又ブレードは初め空気を流通せしめて、被術者の失神状態を覺醒する所以の理を説明するに苦しんだのであつたが、後にモノイズム状態に付いて、此の理を了解するに至つたのである。催眠状態中特に動作を刺激せられたる官能は、全く被術者の注意を要するものであるが、同時に他の官能は知覺遲鈍の状態に移るのである。斯の如く唯一の官能のみ直に動作するは、主として、是の理に因るのである。眠つて居る官能を提醒することは、猶動作せる官能を止めるのと、其結果相等しいのである。此の故に筋肉の硬直状態も冷き空気を皮膚に襲はしむれば止むのである。

る。奈何となれば、是れ皮膚には被術者の注意を喚起せしめ、而して筋感覺を刺激して、此状態を取回すからである。ブレードの説に従へば自然的睡遊状態と、人為的睡遊状態との間に大なる相違がある。自然的睡遊は内部の刺激によつて生ずるのであるが、人為的睡遊状態は被術者が絶對的に眠らせられて安靜して居つて刺激がない、而して深い状態に移つて行くのである。ブレードは自然睡眠と人工睡眠（催眠のこと）とは同一であるとは認めないのである。此二者の主なる相違は、心理状態の如何に依つて、決定せらるゝのである。普通睡眠の遷路に在つては、心が一の觀念から他の觀念に遷轉しつゝ、受動的に再生して、頗る散漫的なのである。一の思想の規則正しき遷路に注意を向けることが不適當である。又意志を要する作用も完成することが出来ない。而して此の受動的作
用が、睡眠の間續いて居るのである。目を覺ますぬほどに、極、和に緩かな調子の暗示と刺激とを加ふれば唯夢を見るばかりである。同時に其暗示其刺激は夢を結ぶ

にしても、睡れる人の心作用が一定の生理的動作に影響することなしに消失し去つてしまふのである。

之に反して催眠は、心の能動的で又集中である。而して催眠方法に依つて生ずるのである。此の状態は頗る暗示負であつて、色々の刺激が被術者の心の上に運ぶことも出来る。(術者の暗示によつて)又催眠状態に在つては、普通睡眠に於て若しくは他の療病的の方法に於て、治癒することの出来なかつた病氣を治癒することが出来る。

第九章 磁石の魔力

ブレード時代のメスメリズム家は磁石や或金屬又は結晶には一種特別な力があつて感覺ある者に作用を及ぼすと主張したものである。即ち此等の物に近くと或はオウラ症のやうな不快感を惹起したり頭痛を催したり或は其儘殞れるかと思はれるやうな烈しい痙攣と共に失神したり奏漢屈に罹つたりする。又感覺が非常に過敏になることもあれば磁石の兩極から火花の出るのを見たなどいふものもある。そこでブレードは此の事に関して研究した所が此の現象は受術者が何を要求されるか豫め知つて居る時及び施術者の暗示又は質問によつて必然の教示を得た時に限つて起るもので此の二條件以外には決して之を見ることが出来なかつた。しかし摸倣磁石でも受術者が眞物を用ひて居ると信する場合には此の現象が起るのであつた。

ライヘンバッハの確かに認る所では、感じの早い金屬板を磁石のある箱の中に入れ

ると、其の金屬板はまるで存分光線に曝されたやうな印象を受けるとのことである。ブレードも此の實驗を繰り返して更に老練な寫真師に頼んで此の實驗を行はしめた。ところが迷はしい分子を悉く撤去した後には、實驗の結果は何れも反對であつた。

ブレードは磁石力又はオデリック力に因る結果といふものは實は全く暗示された觀念の作用に因るのだと絶えず主張して居た、彼も云ふ如く次の實驗は此事實を證明し又原施術者と被術者の間に和合が存立すると想像されて居るにも拘らず被術者は原施術者以外から來る暗示には答へるといふ事實を示すではないか。

或日ブレードはロンドンの一醫師を訪問した、其醫師はメスマリズムを治術に應用する人でブレードに向ひ自分は此頃磁石を使つて治術上驚く可き効果を得て居る、今も現に催眠中の被術者があるから、早速此の事實を證明して見やうか、試みに磁石で受術者の肢へ觸ると直ぐに秦漢屈を起すと云つて、肢へ觸れると果して其の通

りの結果が生じた。すると今度はブレードが自分も磁石のやうな強力な器具を携へて居るが、此れでもつて一ツ試めして見やうか、自分が此れを被術者の手へ渡すや否や、彼は又秦漢屈を起すのだと被術者の面前で醫師に話した。果して其の通りに行つて、前に醫師がやつた場合と、毫も異なる所がなかつた、パスス法で秦漢屈を解いて器具の位置を更へて今度は結果に甚だしい變化があらう——受術者は筋の麻痺で器具を握ることも叶ふまいと云ふと果して其の通りの結果を見る事が出来た、そこでブレードは彼の用いた一見魔力を有するやうな器具の本性及び能力を靜かに説明して、實は靴の鍵で、又力に變化があるのは、被術者がブレードから聞き込んだ暗示の結果に外ならない、此の實驗は單に催眠中に於ける暗示の効力を示すに止つて、磁石や鍵は別段與つて力あるのではないと云つた。

千八百四十三年にブレードは或金屬の催眠力を有するといふエリオットソンの信仰及びウエークレーの試驗を参照した。ウエークレーは無催眠力金屬を用ひて催眠力

金屬を用ひて居ると信じさせ、被術者を催眠に陥らせる事が出来るによつて、すべて被術者は欺かれるのであると結論した。之に反して、ブレードは、其の催眠は純正であるが、全く暗示によつて惹起されたもので、金屬には催眠力も、無催眠力もないのである。斯くの如くしてブレードは、木製トラクター作用を説明した、此の木製のは千七百九十九年にヘイガース博士が、ハーキンス製金屬トラクターに代へて巧妙な結果を得た。此れは二片の金屬から成る其の一片は鐵、他一片は真鍮、共に長さは三インチ、一端が尖つて、一端は鈍い、コンネクチカット州ノーウイチのエリシヤ、パーキンス博士の發明に係り、千七百九十六年に專賣特許を受けた。頭痛神経痛の治療に用ひられ、其の使ひ方は、患部の上を二十分ばかり引き廻すので、此の療法は一時非常に流行したもので發明者の名譽の爲めパーキンス治療法と稱された。ブレードの云ふ所によれば、身體の一部に長く注意を集注すると、種々不規則な感覺の起る事は以前から認められて居たが心的發動によりて、間々此の驚

くべき治療が行はれ又恐怖からは甚だしい病氣進んでは死までも起すの事實にもかかはらず、普通此等の感覺は肉體的の變動に伴はれて居ないものと思はれて居た。其著メデカル、ノート、アンド、レフレクションの中に身體機官に及ぼす注意の影響を書いた、ホーランド博士(後にサー、ヘンリー、ホーランド)の外は、一人として健全な人の意志なる心的努力によりて、格別生理的變化が起る事、及び同結果が他より直接又は間接の暗示によつて、無意識に生ずる事を信じなかつたのである。ブレードは、暗示の力が身體の作用に及ぼす變化の實例として次の數個を挙げた。

(一) 乳の分泌の増加

(二) 永續性のヒステリー性麻痺を有機的傷害を起さずに治す。催眠中の患者に信用さるべき口頭暗示を與ふれば、其の結果、時には急速で、麻痺は魔法でも使つたやうに立ちどころに失せるのである。

(三) 密閉した管中の藥材の活動。ブレードは硝子を通して作用するといふ藥材が亞米

利加で発見されたと聞き知つた。此れは若し患者が其の薬材の入れてある瓶を手に持つと、口から飲んだと同様な効果を生ずるといふのである。此の事を嗤ふ人に對し、ブレードは反告して想像注意希望は此の薬材の所謂特效と同様の効果を來し得と云ひ間もなく實驗で之を證明した。硝子越しに作用するといふ此の亞米利加産の、吐劑の性質を説明して置いて、受術者の手に、色を付けた水の一瓶を渡すや否や、受術者は苦み出したが更に第二瓶を渡されると、間もなく此の苦痛は失せ去つた。彼は豫め第二の瓶には解毒劑を入れてあると、教へられて居たのである。

ブレードは斯の如き數多の事實によつて催眠術が病氣を癒し或は輕める事を信じた暗示は口頭、又は間接共に患者の心中に或觀念を喚起し、此の觀念が其の性質に従つて、或は興奮劑となり、或は鎮靜劑となつて働き、各機官或は官能へ注意を向けたり或は其から注意を引去つたりするのである。普通の醫療では此の結果を得るの

に全般又は一部の興奮或は鎮靜劑となる薬材を調合して用ひるのに外ならない。人が顔を赤らめるのは、毛細管血液循環の變化に基く現象で心に印象を受けた直接の結果として表はれるものである。此れと同じやうに、有力な觀念は身體の他部分にも等しく強い結果を來さねばならない。ブレードの説く所によるとホモバセー療法も、催眠術と同じく暗示の作用を證明するものである。サー、ジェ、ワイ、シムプソンは次のやうな事を證明した。或るホモバセー療法稀薄劑は、眞に弱いもので、患者は原薬材の一粒を服用するのに、日夜一稀毎に怠らず用ひても、三萬年を要する。然るに他のものは、其の稀薄な事驚くべきで、一粒の薬材を含むには、地球の容積の六十一倍の質量を要するといふことである。更にブレードは、薬の効驗と、相關聯する心的作用があまり忽にされて居るが、普通の治療の效果の中、何れ丈けが薬の功で、何れ丈けが暗示の功であるか、之を發見するのは随分緊要の事だと云つた。正氣で服薬すれば、必ずや心的印象が起る。

或藥の効能に關する信用の變化等は、此の心的印象によつて、説明されやう。例へば或藥が一時非常に持離されるかと思ふと間もなく他の藥が出て來て、前の藥は最早人が見むきもせぬやうになる。此れは無論自然起るべきで、信用ある醫師に藥を盛られると、患者の心の状態に變化が起り、結果が好ければ好い程、醫師も患者も共に信じる所が確かになつて、同じ藥でも、實際よりは効能が生ずるといふ次第である。之に反して疑はしい人に盛られると先のと毫も異らぬ藥でも患者の精神状態の工合が悪いから折角の藥が實際の効能を幾分か殺がれる譯となる。千里眼やラバシーに對するブレードの説及び彼の實際の際誤謬を防ぐ可き規則に就ては吾人の既に述べた所である。

骨相學的暗示

催眠現象に對する心的感化の勢力を解してブレードは竟に骨相學に毫も信仰を置かぬやうになつた。所が千八百五十四年十一月のノース、ブリチツシユ、レビユ一の

一筆者が彼を骨相學催眠術家と取り違へたのみならず受術者催眠中に其の頭の或部分へ觸つて笑はせたり祈らせたり或は歌はせ盜ませ戦はせたり等出來るといふ信仰をブレードに歸した。そこで彼は答へて若い時から實驗して居たが骨相學の原理には反對もせねば賛成もせぬ、研究はしたが一向定見がないと云つた。先の現象は種種の形で表はれるもので第一には骨相學に就ける豫めの知識から第二には催眠中の訓練即ち一點に觸れると共に口頭で或觀念を暗示し聯合せしむることから起るのである。此の任意の觀念聯合は頭部に限らず他の部分に觸れても起す事が出来る。そして此の接觸は單に表示作用を司る筋肉を活動させる丈けに止る。斯くて受術者の心中に醒覺状態にあつて該筋肉に相聯關する觀念を喚起するのである。今述べた第二の方法は自然のもので心的發動及び筋肉の發動との間に存する關係の轉置に外ならない。即ち此の接觸は最初に或情又は情緒表示の土臺を爲す筋肉を動かし次に此の生理的表示が受術者の心の中に相應する情又は情緒を暗示するので又此の情或は

情緒と心とは醒覺状態に於て前に相聯關して居たものである。普通の場合には心的印象が最初起つて其に應ずる生理的表示を生ずるのであらうが、此處では生理的條件が心的條件に先ちて其の原因となつて働くのである。

ブレードは千八百四十三年に此の學理を公にし翌年になつて所謂骨相學的現象は接觸の點が身體の何れの部分であらうとも口頭暗示で之れを起し得ると實地に證明した。

第十章 催眠現象生起の最も有効なるもの

催眠及び其の現象を來すのにブレードは始め機械的方法を執つたが後此の方法は主として間接暗示として働くもので催眠を起すには直接の口頭暗示が最も有効だと云つた。試みに受術者を催眠させ置き彼は得んとする結果を豫め定めてやるが暗示の際の音聲變化と共に屢ば其の結果に差異を認められた。例へば受術者に羊の想像を描かして居る時に快活な調子で其の羊は何色か尋ねると受術者は大抵は白いと薄い色だとかと答へる。更に今度は何色かと今度といふ字へ悲しげな音調を含ませて尋ねると答は大概黒いといふのであつた。

ブレードはパッス法や其他の生理的方法次の通り説明した。新らしい印象は心的であつても生理的であつても必ず現在やつて居る作用に變化を來す。腦は數多の印象を受けて其勢力を心に及ぼすが此の印象は感覺機官を通じて心に傳る時悉くは認

識せられない。然るに他の印象に至つては意識出來ぬ位かすかなものでも神経や毛細管に充分一部の感化を與へるのに足るのである。此のやうな譯で或人は讀書に氣を取られて通風の中に座つて居るのを氣が付かないかも知れぬが此れがレウマチスの原因となるかも知れない。同様に被術者が殆んど意識しがたいパッスでも壓力や空氣の動搖或は氣温の變化や電氣を含める度合によつて生理的結果を起すのである。然しながら此れも他から注意を引去つて之を身體の一部又は一官能に集注するか又は豫め生理的印象と聯關した觀念を起すかによつて直接に心的活動を生じた場合に於て最も優勢なのである。此の結果とても直接暗示で中和する事が出來又練習によつてパッスをして先に惹起したのと反對の結果を起せる事も出來るのである。即ちパッスを爲すに當りて施術者が起るべき事を口頭で述べれば、普通の結果が生じていで述べた通りの結果が見られる。此の時からブレードの所謂「復意識記憶によつて」同様の印象が共に聯關して居た觀念を喚起するのである。

第十一章 催眠術の危険といふことに就てブ

レードの論

一部の催眠術論者の意見では、動物的情慾を惹起するに用ひ得と云ふのである。即ち貞操な婦人が催眠中に不徳漢の犠牲となつて醒覺後何をしたか一向意識に止つて居らぬ事があると云ふのである。しかし此はブレードの觀察した事實と符合しない。彼は催眠術の實行に危険の伴ふ虞がないといふ自家の信仰の理由を擧げて答へたが其中でも重要な件は

(一) ブレードは催眠術は性質として受術者の智力と承諾なしには決して行へるものではない事を巧みに證明した。

(二) 催眠状態にあつても認識や判断は休まない。此れは警戒状態に於ては無論の事だが熟眠状態にあつても事實である。若し熟眠状態中に道徳心に反する行爲を仕掛

けられると彼は直に警戒状態に移つて醒覺状態にある時と同様に自家を防禦する事が出来るのである。

(三) 催眠状態が道徳心を強め受術者の良心を英敏にする事は疑ふべくもない。

(四) 今議論の都合上不徳漢が熟眠状態の受術者を辱しめ得ると假定しても醒めて後受術者が憶えて居らぬといふ事實は決して犯人を保護しない、催眠中でも意識は決して休まぬもの其の間に起つた事柄は次の催眠の場合に心に呼び起し得るのである。

更にブレードは催眠術に有りもせぬ危険を誣ひる世人は何故にコロ、ホームやエーテルの如きもの、使用に反対せぬかと反問し次の二事實は注意を促した。

(a) エーテル魔睡の初期状態中に高度の春情が自然に起るのは屢ば實見した所である。

(b) エーテル、コロ、ホーム其他の魔酔質の薬材は屢ば犯罪の目的で用ひられ本人の

知らぬやうに之を行ひ其の無意識の間に多くの犯罪が爲された。

第十一章 ブレードの催眠原理の結論

ブレードはタウンセント大佐の自由に生氣を止める事及び印度の托鉢僧がやる長時間の失神の如きも催眠術で説明出来ると思つた。托鉢僧の例は英國士官の證明によりて容易に信を置くに足ると思ふ。それは或時の事托鉢僧が地下四尺の所へ埋められ其儘九日間捨て、置くといふ手筈の實驗で英國士官は絶えず數名の番卒をして見張らせた。しかし三日目になつて士官は托鉢僧が死にはしまいか又死ねば自分の身の上へ禍が降りかゝる譯と心配し始めて掘り起して見ると僧は最早冷く硬くまるでミイラのやうで一見生氣がなかつたが十五分間ばかり手當をする中に蘇生した。ブレードは又麻膠で起された状態と或催眠状態との間に類似を見出しカルカツタのオシヨネー博士の實驗を引用して之を確めた。

ブレードの説は他の説を論ずるに當つて更に引き合に出るが此處で一つ注意して賞

ひたい點がある。それは彼の説が彼の智識と共に變化して居る事即ちブレードは前後三個の各々異つた説を立てた。第一に彼は催眠術を殆んど全く生理的見地から説き次に之を不随意のモノイズム及び注意の凝集に歸した。第二に抱いた説は前者と異つて居る。即ち催眠術に於ては理性も意志も傷つかぬ事及び注意は同時に一個以上の點に向け得べき事を認めた。故に此れは不随意のモノイズムの状態である。彼は進んで此の状態は全く意識的なる事及び醒覺に及んで此の状態の記憶を失ふけれども之は次の催眠に當つて取り戻し得る事を一層明白に認め最初催眠と名付け次にモノイズムと叫ぶ状態を竟に復意識を記した。既述の通りブレードの説で廣く催眠術學者に知られて居るのは其の早年時代のものに限られて居る。それで彼が完成の上で公にすると約束した第三即ち最後の説に至つては彼の意向を察して之を解釋する人は殆んどあるまい。茲に述べるのは知る人のない彼の原稿から引き出したものである。

- ブレード晩年の學說を概括すれば次の如くである。
- (一) 催眠は生理的方法のみでは行ひ得ない。
 - (二) 催眠及び所謂メスマリック現象は素より主観的のもので共に直接並に間接暗示で起される。
 - (三) 催眠には生理的及び精神的の變化の特色が伴ふ。
 - (四) 數多の現象の同時に出現する事は認められ副意識の合理的動作は特に重要視すべきである。
 - (五) 意識は害はれず道徳心は増し罪惡は暗示しても無効である。
 - (六) 和合は暗示で惹起した全然人工的の状態である。
 - (七) 直接口頭暗示の重要並に生理的方法の心的感化は共に認められる所。
 - (八) 暗示は現象を惹起するに用ひられる工合に止つて現象其物を説明出来ない。
 - (九) 催眠と普通の睡眠との間には重大な差異がある。

- (十) 受術者を睡眠類似の状態を経せしめずに催眠に導く事も出来る。
 - (十一) 精神堅固の者は感じ易くヒステリー性の人、最も催眠に導き難い。
- 英國では科學界の有名な人特に教授カーペンターやペンネットがブレード存命中其の壯年時代の說を廣く採用した。しかしブレード晩年の說に至つては彼等は殆んど若しくは全く知らなかつたらしい。ペンネットはブレードの所謂モノイズム中に含まれる心的並に生理的狀態を想像して書く所あつたが眞に一言の價値がある。内容其物に中々の興味あるのみでなく之れで、催眠術を説明するに大脳の禁止作用生理的自働又は此等兩者の結合を以て試みた近年の研究の學說を量ることが出来るのである。

第十三章 催眠の特質に關するペンネットの論

ペンネットの云ふ所によれば催眠の特質は大脳裂片の白質神経管の官能的活動の變化である。此の神経管の一部分は單調な刺戟の連續によつて麻痺し其結果他部分の活動が高まる次第である。それで此の神経管は大脳の神経細胞を連結するから其の官能の中止は同時に神経細胞この連絡を絶つ事を認められる。

催眠現象を精神的方面から見て彼は之を優勢な束縛を受けぬ觀念で説明した。さて此の觀念は何によつて優勢を得るかといふに平常の場合では其の發生を制御し得る他の觀念が一向起らないからである。何となれば後者觀念が聯關する腦の一部分に一時活動中止を來し即ち神経細胞との連絡が聯合纖維連絡の防遏によつて中絶するからである。斯くてペンネットは云ふに知覺の記憶は腦によつて喚起されるが平常の場合では判斷比較及他の心的官能の働きによるのである。此等の官能が衰へると

暗示された觀念が優勢を占め當人は其の現存を信じる事になる。斯くして彼は恰も一知覺の誤認は他知覺の健全な活用によつて氣が付くやうに、心の官能を大體から見て之に誤謬を正す一種の力ありとなした。誤認には心的と知覺的との差別があつて、前者は優勢な觀念によつて起され、恰當な推理で改められる。後者に至つては一知覺の顛倒によつて生じ他知覺の正常活用で正す事が出来る。

之を要するに此の人の説によると催眠にあつては暗示された觀念が優勢を得て心的又知覺的誤認を起すので、之は或更に高い中心の禁止作用即ち禁止力が一時中止されて居るのに基因するのだ。ペンネット教授は此の説を千八百五十一年に始めて發表したのである。

注意、近世催眠術研究者の説は多くの點に於て吾人の今述べ來つたものに類する。サルベトリ學派はメスマリズム論者の誤謬を再現しハイデンハインは一向專念に關するブレードの説中精神的方面に屬するものを更に起し尙ほベルンハイムは其の生

理的方面のものを復活させた。而して他の研究者は催眠現象を全然生理的又は心理的見地から論ぜずにブレード、ペンネットの如く心的變象は必ずや生理的變象と相聯關し生理的變象も亦必然心的變象を伴ふものだといふ事を認めためたのである。復意識に關するブレードの説は近代の學說中最近のものに再び現れ又地盤を固めつつある。此の説たるや全く特有のもので他の説では催眠現象は或禁止作用に因ると思はれて居る。然るに復意識又は第二意識の説によれば被術者は彼の有機體を統轄するに増された力を持つて居るとせられ彼の意志は其力を増し彼の意識は損傷を受けぬと想像される。

第十四章 近世催眠術學說 (チャーコットの説或はサルペトリ派の説)

今日實地に催眠術を行ふ人で此の學派の説に信を置く者は殆んど皆無である。既に萬國心理學大會(千八百九十二年ロンドンに於て開かる)の頃でも此の派の所説は一向注意を惹かず最早殆んど全くナンシー派の見解の壓倒する所になつた事が明白であつた。

然しながら催眠術を實地に究めぬ人は此の學說の催眠現象に關する説明を以て満足のものとして居るから茲で一應審査せずに置く譯には行かない。左に此派の學說中主要の點を掻き摘んで述べやう。

(一) 催眠は人爲的に惹起した病的狀態で神経系統の病は唯にヒステリー性の人々のみ見る事が出来る。婦人は男子よりも一層容易に催眠狀態に誘ひ得るけれども兒

童や老人は殆んど感じない。

- (二) 催眠は全然生理的方法で惹起し得又本人が知らぬ間に催眠させる事も出来る。
- (三) 催眠現象は三個の状態、即ち昏睡、秦漢屈半睡に分ち得。斯くの如きは皆特種の生理的刺戟で起し又終らせる事が出来る。
- (四) 未だ催眠術の醫術的價値は認められない。
- (五) 暗示の力で半睡の人が悪事を行つたといふ例はないが此の危険は全くないとは云へない。催眠を惹起さうとしてヒステリー性を起す事がある。
- (六) 或種の催眠現象は磁石金屬等を用ひて起し變移し又解く事が出来る。
- (七) 普通の状態と催眠状態には暗示に差異がある。前者は生理學的現象後者は病理學的現象である。暗示が利くといふのは必ずしも催眠の事でない單に催眠の一徴候に過ぎない。

上述の説に手強く反對したのは所謂ナンシー派である。其の駁論の詳細に立入る

に先つて茲に一つ注意して貰ひたい事がある。それはナンシー派の云ふ如くサルベトリ派の説は其根據極めて薄弱で其一論者の告白する所によれば十年間試みて僅かに十二回成功して被術者を催眠せしめたをして其の被術者といふの概ねは其病院内に以前から居た一患者に限られて居たといふ一事である。茲に於てはナンシー派は自派實驗の範圍廣きに注意を喚び其學説も千百の實驗より得來つたものだと公言した。

(一) 催眠はヒステリー性の人にのみ起し得べき病的状態なりや否や。此問題に對しては否と答へる外はない。チャーマツトは兩者に於て尿に同一特徴を見るから催眠術もヒステリアも同一のものだと云つたがモルは答へてチャーコットの被術者が悉くヒステリア患者であつた事を指摘した。チャーコットは又醒覺状態特有の現象が催眠状態に於て容易に惹起されるところから難なくヒステリアの徴候順序を製出した。

若しヒステリア性の人のみ 催眠術を感じるとせば先に示した統計の上から全人類の八割はヒステリア患者であると決論せねばならない。

更にヒステリアとは縁の遠い階級の人々を實驗した結果を見るに成功数は遙かに勝つて居る。リポーは陸海軍人が特に催眠術を感じ易いと云ひベルリンのグロスマンは頑丈な北獨逸の人の方が感じ易いと明言した。ツリーツヒのフホーレル教授は其の養育院の係員の大部分を催眠せしめたそれも成るべくヒステリア性の人を除いてやつたとの事である。更にエスデイルの被術者は皆男子で特にヒステリア性とは縁遠ひ人達であつた事實に注意して貰ひたい。

此等の事實はフホーレルやモルの云ふ所即ち健康な人よりもヒステリア性の人がかつて催眠を惹起し難い事を證明する。既に述べた通りフホーレルは心的に健全な人は催眠術を感じ易いと思ひ又モルの云ふには若し有機體の病的状態が催眠の必要條件であるならば勢ひすべての人の頭腦は健全でないと決論せねばならぬ事にな

る。心的不健全者殊に白痴の如きは健體の人よりも催眠に當つて更に困難を感じしめる。伶俐な人意志の強い人よりも鈍い人愚人又は弱志の人の方が度し難い。フホーレルの云ふ所によれば最も催眠術を感じしめ難いのは發狂者なさうだ。之に反して心的健全の人で催眠術を感じた者はリポーとベルンハイム丈の實驗のみで既に數千に上つて居る。自分の實驗も全く如上のものと符合する。例へば以前治療の目的で丈夫なヨークシャアの農民共に催眠術を行つた頃は極めて容易で百人が百人ながら成功したが、被術者が慢性の神経症患者と極つて居る今日では施術上の困難が大層増した。そして此の經驗は自分一人のものでない。フランス、スイツランド、ホーランド、スエーデンの各國の臨床診察を歴訪した時自分は何處に於ても此の困難を親しく經驗して居るのを見たのである。

(二) 果して婦人は男子よりも感じ易いか？

サルベトリ派以外の催眠術研究者は皆受感の度に於ては男女兩性の間に殆んど寧ろ

全く差別を認めないと云ふ事に一致して居る。リポールの云ふ所では受感の度に於て
 両性間の差異は百分の一度以下に過ぎない。ウイングフィールドの被術者は悉く男
 子であつた。エスデイルの被術者も大部分は男子であつた。

(三) 果して児童と老人とは催眠術を感じないか？

既に述べた通りウエツターストランドは児童は三四歳より十四歳迄は悉く感せしめ
 得と認め、ペリロンが児童二百五十人を試みた時初回で催眠を起したのは其の八割
 であつた。リポールに到つては特に児童を感じ易しと爲し其の統計表の一に十四歳迄
 は百發百中と記してある。丁年以上になつては年齢は催眠にあまり關係しない。如
 上の表によると十四歳から二十一歳の間では殆んど一割の失敗、六十三歳以上の
 人は一割三分の不成功があつた。

(二) 催眠は機械的方法のみで惹起し得るものなるや否や。

之に對しナンシー派は否と答へ自分の答もナンシー派と一致する。心的勢力能く排

除され被術者が何を求められるか全く知らずに居るのに機械的方法で催眠が起つた
 といふ例を聞いた事がない。ルイスが雲雀鏡を獵師から借りて之に催眠力を與へた
 以前に雲雀鏡を眺めて催眠を惹起した人はない。然るに生理的方法ならば何を求め
 られるかを豫め知つて居る被術者に行つて成功を得るのである。

(三) 催眠現象は三個の特殊状態に分ち得るや？

サルペトリ派が生理的刺戟から起るとして擧げた特殊状態の發生は他の研究者には
 一向認められない。自分の見た催眠の被術者は何千人なるか知れぬが其中一人とし
 てサルペトリに於て目覺ましい現象を呈した手術に感應する者がなかつた。之に反
 して自分及び他の多數研究者の見る所では此等特殊の状態は口頭暗示及び被術者を
 して合圖と共に其状態を表はさせる訓練とで惹起し得るのである。然しながら此れ
 は常に人爲的状态たるを免れない。
 尙ほサルペトリ派の特殊状態は暗示を厳しく排除した證據がなくては其儘受け取れ

ない。之に反して施術者の面前で實驗の事を彼れ此れ討議する場合があると吾人は聞いて居る。此の状態が其の本來の明瞭精確を失つて居るのは其の論者も記す所で特に注意する價值がある。特種状態に加へて他の現象が表はれるから特種のものゝ活動範圍に變化を起し、即状態が混合する。更に現象は生理的刺戟に應じてのみ表はれずして其源に於て不規則となり一方法が其固有の状態を起さず三者を悉く惹起したりするのである。此れは此の現象が實際心的状態の變化直接及び間接暗示の結果であつて一定不變の生理的刺戟から來るものでない事を示すのではあるまいか。更に此の意見を強ふ事實がある。それは生理的刺戟は被術者と和合して居る人が與へた時にのみ有効であるといふ一事なのである。

(四) 果して催眠術に醫學的價值なきか？

單に實驗を目的として治術を念頭に置かねサルベトリで行はれた實驗に對して吾人は之を否定する反證を有すると共に催眠術を病の治癒に用ひた千百の實驗より得た

肯定的の證據を持つて居るのである。

(六) 或る金屬磁石其他の無生物を應じ又は近けて種々の生理的並に心的現象を惹起し得るか否か。

サルベトリ派の主張とナンシー派の駁論の間にはブレードとメスメリズム家との間に起つた議論に酷似したものがあつた。舊來の誤謬心的勢力を忽にした結果は再び此處に表はれて藥材が閉ぢた管中から外部に作用すると云つて居る。技術者の生理的並に心理的狀態は他人又進んでは無生物にまでも移植し得ると云つて居る。しかし此れが駁論に立入る如きは無用の業で再びブレードの學說を繰返す事となる。此の派の云ふ所は多くは荒唐無稽で議論の必要さへ起らない。例へばユダヤの淫賣婦の前へ桂花水入の管を出すと彼は聖女マリアを拜むと云ふが如きである。各種の宗教的信仰は各種の神経中心で表はされ此の中心が適當な生理的刺戟によつて活動を起し得るのだといつた事も推して知るべきではないか。此の教理の主なる使徒は

ルイスで英國では千八百九十三年には各新聞雑誌が此の教理に對し可なりの注意を拂つたものであつた。實に或名高い醫學雑誌の記者の如きは此を駁する爲めに態々一書を公にした位買ひ被つたのであつた。が此人はエム、デウチャーデン、ピウメツが既に千八百八十八年にルイスの實驗は極めて疎忽淺薄なもので催眠術研究者中には其説を取る者がないとアカデミー、デ、メデシンといふ雑誌で報告したのを知らなかつたものと見えた。

サルベトリ派の説は磁石金屬等に種々の奇現象を惹起する力を歸する點に於てメスメリズム家に似て居るばかりでなく他の點に於ても殆んど差異がない。例へばメスメリズム家は上述磁石等の有する力に感じないものもあるが感じるものを「感性體」と云つた。サルベトリ派の方では此の「感性體」を名付けてヒステリー性とした。更に此の兩派は此の力を以て單に生理的のものとなす事に一致し又本人の知認なくとも又其意に逆つても作用させ得るとしたのである。しかし茲にメスメリズム

家とチャーコット即ちサルベトリ派との間に一つ注意すべき差點がある。エリオットソンが此の問題の研究に手を染めた頃には其の心的方面及び暗示の勢力に關しては何事も知るに由なかつたので彼の誤謬に用捨すべく又其頃避け難いものであつたのだ。然るにチャーコットが此の研究に取りかゝつた時には既にブレードはチャーコット及び其徒の採用した謬見の謬見たる所以を證明したのみならず彼のリポーも亦暗示の効力及び此の力の存在を忽にしては勢ひ決論の正確を望み難いと云つて居たのである。それにも拘らずエリオットソンの先登になつてやつた事は攻撃の的になつて壞れかゝり、チャーコットの方は其の謬見は彼の科學に於ける他方面で成した高名を別段傷けもしなかつた。

第十五章

催眠現象に關するハイデンハインの說

催眠はヒステリー性の人々のみ起し得といふサルベトリ派の說は全く生理的であると同時に病理學的なる催眠現象の説明を供する。一方に於てハイデンハインの說は純粹な生理學的學說の一模型としても差支ない。彼の云ふ所によれば催眠の現象は大脳外皮の細胞の活動を抑へるのであつて此の高等中心は他の神經の單調な刺戟例へば凝視とかパルス法等で禁止せられ、又知覺神經の印象は普通にあつては高等中心に入り意識を起して運動を生ぜしめるが此の場合では直接に起動中心に達して同じ事をやるとの事である。此れは全く「神經流通の簡便循環」說である。ハイデンハインは催眠中の被術者を全く自動機械と見做し此の機械たるや其の前で行はれた動作を真似るが自分では何をして居るのか一向意識しないものと爲した。被術者

の腕を動かさうと思へば腕を動かす形象を彼の網膜に映せしめねばならない、又は運動の無意識感覺が彼の腕の受働的動作によつて起されて居らねばならない。被術者は其の爲す動作に應ずる一觀念をも有せず知覺神經の印象は意識的認識にも自確的動作にも至らずに無意識的模倣を起させるのである。催眠被術者が種々な事をやるに就てハイデンハインは被術者が自ら爲す所を自確すると考へるのは誤解で、全く問題外の話、被術者は自らに就て少しも考へもせねば知りもしないと云つた。氏は尙ほ被術者が催眠中に經驗した感覺を忘れるのは此の感覺の無意識的なのである證明とするに足ると主張した。彼が此說を發表したのは千八百八十年で大に世の注意を惹いた。例へばグラスゴウのマンケンドリツク教授の如きは之を受入れてエンスアイクロピデヤ、ブリタニカの第七版中に再說し以て所謂動物磁石の現象を真正にして科學的な解釋を與へるものとした。此の說は次の點に於て反對が出来る。

(一) 一次の事實を明瞭にしないうで催眠動作を外皮官能の禁止に歸するは謬見と云はねばならない。即ち運動に關する此等官能の通常作用は可なりに禁止的である事及び所謂自働反動を來す方法の完全な説明は「禁止作用の禁止」と云ふのに外ならない。

(二) 外周刺激による大脳の禁止説の精密な解釋を與へながらハイデンハインは觀念又は情緒で起す中心刺激の力を議論中に落して居る。此の刺激の力でも同じく催眠は起るのであるからハイデンハインの説は「優勢觀念」説の代りとしても受け取り難く又同等のものとも認められない。何となれば單に生理事實を生理事實的に記したものに過ぎないからである。

(三) 此の説は其の内容に於て新しいものでない。細目の小部分の外は全くエヂンバラのジョン、ヒュー、ベンネットが千八百五十一年に著した學説の拙い焼直しに外ならない。しかし既に述べた通りベンネットは全問題に關して彼よりも一層明瞭な見解を有して居て、事實其物に代へるのに生理事實の生理事實的説明を以てするやうな

誤謬には陥らなかつた。

(四) 催眠は單調な外周刺激のない時のみならず少しの外周刺激がなくても起し得るのである。今日では催眠は中心刺激で催眠を起すのが通例であるが此の場合既に催眠の經驗ある人には強ひて刺激の單調なるを要しない。唯「眠れ」といふ簡単な言葉だけで催眠状態を起すに充分である。

(五) 催眠中の人が其の見る動作を真似し又言葉で暗示された動作を行ひ能はぬといふのではなく事實は其の正反對である。通例として僅少の口頭暗示の下に充分ハイデンハインの記した動作は起る。しかし豫め訓練がなくては其の面前で行ふ動作を真似る事はしない。モールの云ふには模倣作用は催眠中の人が其を意識し又其を爲す事を期待されると知る時にのみ起るとの事である。此の動作若し無意識的反動ならば受術者は何人の動作をも真似るであらうが事實に於て受術者は施術者又は彼に其の動作をせん事を望むと知られた人にのみ倣つて動作するのである。此の様な實驗

が數重なる。後の催眠には醒覺状態の時の如く摸倣は自動的に流れてしまふ。然し最初に動作に關して明瞭な觀念を與へて置く必要がある吾人は大脳の外皮を以て觀念の存する所とし又催眠中觀念を脳の他部に移すといふ理由もないと見做すから外皮の活動に就ては毫も疑を挿む餘地がない。

(六) ハイデンハイン唯一の議論は被術者が覺めて後催眠中の事を記憶して居ないといふ一事に基礎を置いて居る。即ち彼の論法によると現在意識の存否は後に之を記憶するかどうかで定まるといふのである。假りに此の試験法を正當とする。新聞の記事を讀んで居た人の意識の有無は讀み終つてから其間に頭を打たれたか何うかといふ疑問の返答によつて定る次第である。尙ほ此の忘却を土臺とする議論に對しては更に根本的な反對がある。それは記憶が屢ば存する事であつて例へばブレードは其の被術者の僅か一割のみが催眠中の事柄を喚起し得なかつたと云ひシレンク、ノツチンの萬國統計によると一割半の人が催眠中の事を忘れて居る。更に催眠中に爲した

事を覺めて忘れても之は次の催眠に當つて再び喚起し得る。尙ほ注意すべきは深催眠に陥る可き記憶消失も暗示で全く之を防遏し得るの一事である。

第十七章 暗示の原理と觀念聯合

暗示といふことを研究することは催眠術者に取りて最も重要な問題である。而して暗示の原理は觀念聯合と關聯して講究を爲す必要がある。何となれば暗示は被術者の身心を支配する或る觀念を生せしむる爲に與へらるゝ刺激であつて、其の興奮せられたる觀念は聯合の法則に依つて、生理的現象、及心理的現象を生ずるものであるから、二者相關聯せざるを得ないのである。

ラッド博士曰く、暗示の原理は身體的事實が精神に從屬せることを證明するものである。而して此の原理は現今あらゆる心理學者の承認せる所である。此の原理は廣く吾人の常態に適用することが出来る。觀念の力的發生的影響と聯結せる暗示は、吾人の行爲を左右するに足るものである。吾人は或る觀念を他人より暗示せらるゝときは、自然に其の暗示せられたることを爲すに至るものである。暗示は模倣若し

くは同情の原理を以て其の基礎と爲せるものである。模倣に就いて言へば、例へば嬰兒の如きも他人の微笑を見て、自らも微笑し、他人の顔を皺めるを觀て、自らも顔を皺めることあるが如き是れである。同情の原理は重なる社會的原理であつて、人々相互に他人の苦樂を觀て、恰も自己の苦樂の如く感ずるものであるから、畢竟暗示の原理の基礎たるべきものである。而して常に人類のみならず、動物に於ても亦模倣を爲し、若しくは同情を有するものである。暗示は吾人の感覺的知覺の重要な要素である。されば知覺の心理說全體は殆ど暗示の説である。吾人の視る所ものは抑も何であるか、眞に其場に存せる詳細なる點までを盡く觀るのではなうて、只一定の現在の状態を視るものである。即ち單に視覺によりて暗示せられしものを視るものである。是れと等しく聽覺に於ても精密に聽かずして、唯暗示せられしものばかりを聽くものである。感情に於ても亦然うである。一定の觀念は感情を暗示するものである。例へば青蟲の匍へることに關する觀念は、吾人に一種の感情を暗

第十六章 パツスに關するブレード及びフオーレルの意見

機械的方法の間接身體上に及ぼす作用より起る心理的結果は、之れよりも強勢なる且一層直接的なる言語暗示に依つて、其の現はれを阻遏し、或は變化せしむることが出来る。ブレードは信じたと同時に、又身體上に受くる感觸が、精神的及身體的の兩結果を現出することが出来るといふ説を猶守つたのである。此の説は頗る合理の者と信するのである。フオーレルは之に反して、暗示には術者の推測せる動作を變改する所の力を有するのであるといふ理に基きて、機械的方法の身體上に及ぼす變化を否定して居るのである。フオーレル曰く、被術者の面を吹くことは余の被術者に對しては、最早彼等を覺醒するに足らないのである。如何となれば、余は被術者に向つて汝の面を吹くことは、汝を覺醒せしむること出来ないけれども、

汝の疼痛を去ること確であると暗示を爲したるが故にと。

フオーレルは面を吹くことの何等の好果なきことを斷言したのである。且つフオーレルは、此論が、物體學派に對する偉大なる打撃であると考へたのである。フオーレルの此論は、猶針で刺衝するも、身體上に何等の結果を來さざる所以のものは、被術者が暗示に依つて、無感覺の状態を呈せる間に、針の刺衝を蒙るも、疼痛を感せずして、他の状態を喚起する合圖として認知することを教へられたるが爲であると、論ずるものと同一論法ではあるまいか。

第十七章 暗示の原理と觀念聯合

暗示といふことを研究することは催眠術者に取りて最も重要な問題である。而して暗示の原理は觀念聯合と關聯して講究を爲す必要がある。何となれば暗示は被術者の身心を支配する或る觀念を生せしむる爲に與へらるゝ刺激であつて、其の興奮せられたる觀念は聯合の法則に依つて、生理的現象、及心理的現象を生ずるものであるから、二者相關聯せざるを得ないのである。

ラッド博士曰く、暗示の原理は身體的事實が精神に従屬せることを證明するものである。而して此の原理は現今あらゆる心理學者の承認せる所である。此の原理は廣く吾人の常態に適用することが出来る。觀念の力的發生的影響と聯結せる暗示は、吾人の行爲を左右するに足るものである。吾人は或る觀念を他人より暗示せらるゝときは、自然に其の暗示せられたることを爲すに至るものである。暗示は摸倣若し

くは同情の原理を以て其の基礎と爲せるものである。摸倣に就いて言へば、例へば嬰兒の如きも他人の微笑を見て、自らも微笑し、他人の顔を皺めるを觀て、自らも顔を皺めることあるが如き是れである。同情の原理は重なる社會的原理であつて、人々相互に他人の苦樂を觀て、恰も自己の苦樂の如く感ずるものであるから、畢竟暗示の原理の基礎たるべきものである。而して嘗て人類のみならず、動物に於ても亦摸倣を爲し、若しくは同情を有するものである。暗示は吾人の感覺的知覺の重要な要素である。されば知覺の心理說全體は殆ど暗示の説である。吾人の視る所のものは抑も何であるか、眞に其場に存せる詳細なる點までを盡く觀るのではなうて、只一定の現在の状態を視るものである。即ち單に視覺によりて暗示せられしものを視るものである。是れと等しく聽覺に於ても精密に聽かずして、唯暗示せられしものばかりを聽くものである。感情に於ても亦然うである。一定の觀念は感情を暗示するものである。例へば青蟲の匍へることに關する觀念は、吾人に一種の感情を暗

示するやうである。而して観念聯合も亦暗示に酷似せるもので、劣等なる暗示は、何處に終りて、高等なる観念聯合は何處に始まるかを知らぬことが出来ない程である。即ち吾人は殆ど暗示と観念聯合との限界を知らないものである。之れを要するに暗示も、又は観念聯合も、甲なる心的状態より乙なる心的状態に及ぼす結果であると見るべきである云々

とにかく暗示と観念聯合とは、密接なる關係を有するものである。吾人は今暗示を研究するに先ち、観念及其聯合といふことに關し一般心理の説明を爲して豫め暗示説の準備に供しやうと思ふのである

第一節 観念の起伏、及び意識界無意識界、

吾人の有する観念の数は、實に無數限りが無いのである。精神は實に観念の無盡蔵である。さりながら此無數の観念が、常に吾人の心意中に現はれて居るかといふに全く然うでない。其の證據には吾人が眠つて居るときは心意上に観念といふものが

現はれて居ないこと勿論であるが、覺めて居るときでも、現に日露戦争の話をするに方りては、主として戦争の事ばかりに考が向いて他の考が御留守となつて居る。即ち或瞬間に於て吾人の心意上に現はる、観念は、吾人の有する悉皆ではなくして、其中の或部分のみが出現するのである。而して樹餘の観念は心意の何處にか潜伏して居つて適當の機會を得る毎に順次に其表に現るゝものである。かくて幾多の観念が、心意上に隠見出沒し、起伏交替して、茲に所謂心意生活の秩序統一は期し得らるゝのである。

而して其現在、心意に見はれて居る或部分の観念を總括して、之を其時の意識と名づけ、其意識中の観念を稱して、意識界にありといひ、其時隠れて居る無數の観念を稱して、無意識界にありといふのである。譬へて言つて見れば精神は歌舞伎座とか、新富座とかいふやうな、一大劇場の如く、観念は菊五郎だとか、八百藏だとか、其他多くの俳優の如く、或時間内に格段なる技を演ずる爲に、舞臺の上に現はれた

る俳優は、意識中の觀念の如く、此時舞臺の表に現はれずして樂屋の裡に在る幾多の俳優は、宛も無意識界に隠れて居る、觀念の如きものである。而して意識界といふのは所謂舞臺の如きもので、此舞臺の表に上れば觀念といふ役者が知、情、意の錯綜したる臺詞、身振、思入等をなして、喜曲、悲曲の活劇を演ずるのである。しかも其舞臺上の役者と、樂屋の役者と、互に交代するさまは、猶觀念の意識界に在るもの、遂に無意識界に隠れ、無意識界に隠れたるもの、又現はれて再び出づる等、交々變轉して止むこと無いのに頗る酷似して居る。猶又此等の役者が、各其受持つ所の役割を務むるによつて、一齣の劇を完うすることの出来るのは、觀念の隠見出沒によつて精神現象の統一を爲し得らるゝが如きものである。

以上の説明によつて、意識界及無意識界といふことが判つた。然るに茲に一の注意すべきことがある。それは何であるかといふに、吾人の通常用ふる「意識がある或は意識がない」といふ言葉の意味と、今言つた意識界、及無意識界と混同してはならぬといふことである。抑も此意識ある、即ち通常所謂意識といふ言葉は、吾人の眼の覺めて居る時の心の状態をいひ、意識の無い、即ち無意識といふ言葉は、熟睡して居る時の心の状態をいふのである。勿論此熟睡して居る時には、觀念の全部悉く無意識界に在るので、心内の全觀念が隠れて居つて、意識界といふものが閉ぢられて居るといふことは誰も知つて居る。又眼の覺めて居る時即ち意識の有る時と言つても、無意識界と意識界との相異のあるものだといふことは理解せらるゝであらう。今左に此關係を明にする爲に表を作つて見やう。

能動的

意識界——觀念の活動
無意識界——觀念の沈靜

意識界——所動的觀念の活動
無意識界——觀念の沈靜

無意識——熟睡して居る時の心の状態
無意識界——觀念の沈靜

精神

以上の説明に於て、精神、意識、觀念の區別を辯じたのであるが、然らば精神現象と、意識とは別のものであるが、又精神意識は觀念を離れて存在するかといふに、決してさうではない。吾人が通常精神作用と稱して居るものは、意識の現象の總括である。意識に現はるゝ諸種の現象を指して、精神作用と稱して居るに過ぎないのである。精神作用は意識をはなれて存するものではない。又意識は觀念の發動の總括である。心意上に現はるゝ或部分の觀念を、意識と稱して居るに過ぎないのである。意識は觀念を離れて存するものではない。之を要するに、精神は觀念總體が組織せる一團體で、意識は觀念の幾種が組織せる一團體である。故に精神現象の根本たる觀念の外に、意識はなく、意識の外に精神現象は全くないのである。然るに意識なくして精神現象の存するやうに思はるゝ場合がある。例へば夢中にて手足を動かしたり、言語を發するが如きは、一寸見れば精神現象を呈するかのやうであるけれども、是は全く反射運動の作用である。元來意識を生ずる本源は、脳髓にあるので

ある。睡眠中は外界の刺激があつても、之を脳髓に傳へないで、反射的運動を起すものである。手足を動かしたり言語を發するのが即ち其れなのである。催眠状態には意識は勿論ある、唯だ通常状態と多少の相違ある。それは即ち催眠状態の意識は、通常状態の時よりは一層明瞭であるといふことがある。意識の焦點は通常状態よりも遙に高いのである。故に其時意識に現はれたる觀念は非常に猛烈な力を以て生理的に影響を及ぼすのである。此事は次章注意と催眠術の條を参照せば十分理解せらるゝ。

第二節 觀念の再生及觀念の聯合

吾人の有する無數の觀念は、一時に意識界に現はるゝことが出來ずして、或若干の觀念だけが現はれ、他は皆無意識界に隠れ、しかも其隠れたる觀念は、又早晚意識界に現はれて來るといふことは、前既に之を叙述した通りである。斯く一旦無意識界に隠れたる觀念が、再び意識界に現はれ來ることを稱して、觀念の再生といふの

である。

觀念の再生するには、知らず識らず自然に再生するのと、故意に考慮を用ひて再生することの二様の場合がある。前者は之を無意の再生といひ、後者は之を有意の再生といふのである。例へば吾人が將に眠に就かうとする時の如き、別に觀念を再生しやうと勉めもしない。寧ろ現在意識中にある觀念を沈静させやうとするに拘はらず、却つて益々雜念が續々湧き出て來る、益目が覺めて來るといふやうなことがある。初めて催眠術を受くる人の中には、時とすると斯ういふ工合に、別に術者に反抗しやうといふ念慮もないのに、術者が催眠状態に導かうとすれば、却つて益々覺醒の状態に赴かうとして、催眠状態になりがたいことがある。即ち其れは被術者の心意中に、知らず識らず、種々雜多の觀念が續々湧き出て來るからである。斯の如くに自ら意を用ひないのに、知らず識らず觀念の再生するのを、稱して無意の再生といふのである。又學生が試験の問題に就いて答案を作らうと力むるが如き、或は一度

見たり、聞いたりしたことを、他の人に説話せうとして、之を思ひ出すが如きは、之を有意の再生といふのである。

此他に又觀念の再生するには直觀の助けに依るものと然らざるものとの、二種の別がある。彼の夏草やつはものどもの夢の跡といふ如く、吾人が桶狭間を過ぎて今川義元の戦死及其當時の戦況を思ひ出すとか。又他年遼陽邊の滿洲の野に高粱の茂れるを見ては日露戦争の當時に於ける血雨慘劇の狀を追想せざるを得ないであらう。是れ即ち直觀の助けによつて觀念を再生するものである。又其助けに依らざるものといふのは、沈思瞑目して過去に經驗せることを追想するが如きがそれである。

斯の如く觀念の再生といふものは、意を用ふるのと用ひないのとに依つて之を二種に區別することが出來、又直觀の助けに依ると、然らざるとによつて二種に區別することが出來る。而して其有意なると無意なると、はた直觀の助けに依ると依ら

ざるを論ぜず。觀念の再生は觀念の連合と稱する、一種の關係に依つて行はるゝものである。觀念の連合といふのは、二個以上の觀念が互に、或關係によつて連合して、群若くは列を爲して、一團と爲つて居るのを指していふのである。故に若し此の群列中の一觀念が、意識界に浮び出づるときには、これと連合せる他の觀念も亦自ら次第順序を追うて現はれて來るのである。例へば今旅順港の海戦を追想して見るに、東郷司令長官だとか、三笠艦だとか、ペトロパヴロスクの沈没だとか、マカロフだとか、廣瀨軍神だとか、福井丸だとか、大砲だとか、水雷だとかいふやうな種々の觀念が、それからそれと、次第に現はれて來る。而して此等の觀念は、其の性質が各々違つて居るので、東郷は東郷、廣瀨は廣瀨、三笠は三笠、一つ／＼別々のものである。然るに此等の觀念は全く無關係な別々のものとして存するのではなく旅順海戦といふ條件の下に連合して群列を爲して居るのである。一團として統一せられて居るのである。それであるから、此等の觀念は其何れかの、一が再生

せらるれば、他も亦従つて再生せらるゝのである。
此の觀念の聯合には四種の法則がある。(一)類似(二)反對(三)同時(四)繼續是である。今之を左に説明しませう。

(一) 類似の觀念は互に連合して再生す
吾人雪を見ては櫻の花を思ひ出し、氷を見ては水晶を思ひ出し、船乗といへば賭博打を思ひ出すが如きは、類似の律によつて觀念を再生するのである。即ち雪と櫻花とは色の白いといふ點に於て類似して居るから、連合する。氷と水晶とは、其色も其結晶したる形も、共によく類似して居るから連合する。又船乗と賭博打とは、縁喜をいふ點に於て、類似して居るから連合するのである。(縁喜船乗賭博打といふ俚諺あり)斯の如く、一の觀念の性質の全部、若しくは一部、類似する點あれば、此諸觀念は互に連合して居つて其再生を助くるのである。吾人が日常の說話に於て、或は文章に於て、或は詩に於て、或は歌に於て、或は諺に於て、巧なる比喩を設

くることがある。それは皆此觀念の聯合に基いたもので、此連合によつて一層興味を増し、理解を助くること出来るのである。例へば「水至つて清ければ魚なく、人至つて察なれば徒無し」といふが如く、「咲きにけりわが山さとのうの花はかきねにさえし雪と見るまで」心ざし深くそめてしをりければ消あへぬ雪の花と見ゆらむ。といふが如く或は「停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花」といふが如く。或は上機嫌の人を見て、惠比須さんが鯛釣つたやうだといひ、不機嫌の人を見て閻魔が鹽から嘗めたやうだといひ、顔の赤き人を見て金時の火事見舞だといひ、美人を見ては沈魚落雁閉月羞花だとか、卵に目鼻だといひ、不美人を見ては、ふるつこのやうだとか、かぼちやに目鼻だといふが如き、即ちそれである。又音訓の類似せるが爲に、觀念を連合せしむることがある。謎だとか洒落だとか落し咄の如き是である。又國語には引掛け文句とて、地名人名其他の名詞を、文句中に狭み之を兩義に解せしめて、一種の興味を含ますことがある。「互に手に手を鳥がなく吾妻の都」

「いつか我身の尾張なる」氣を奥の間へ入合の鐘がかたきで「恐れ入り谷の鬼子母神」驚木桃の木山椒の木「おうら山吹日蔭の紅葉」等の如きが即ちそれである。而して是亦觀念連合の類似の法則に従うたものである。

(二) 反對の觀念は互に連合して再生す。

吾人病の時に、健全の時を思ひ、貧賤といへば富貴を聯想し、黒いものを見れば、白いものを思ひ、風雨の時には、晴天を思ひ出すが如く、各觀念の相反對せることに依つて、連合し互に再生することがある。是は畢竟、其兩極端のものが相對比することによつて一團を作つて居るからである。吾人の用ふる多くの比喻は又此の連合に基いて組み立てらるゝものである。「氷炭相容れず」雲泥の相違「月と鼈」提灯と釣鐘「頭隠して尻隠さず」鯛の頭をせんより鯛の尾につけ「大の虫を助けて小の虫を殺せ」泣く兒もあれば笑ふ兒もあり「遠くて近きは男女の道」美女は悪女の仇「君子は義にさとる小人は利にさとる」等の如き何れも皆此の反對せる、觀念の

連合を説明するに足るものである。此他説話、文章中、反對の場合を擧げて、説者の意見を明にするが如きは、此連合の法則を應用たしものである。

(三) 俱在の觀念は互に連合して再生す

吾人若し旅順港の海戦といへば、忽ちにして、東郷、廣瀬、マカロフ、等の事を思ひ起し、嘗て學びし學校とか、嘗て遊びし場所とかに至れば、舊師舊友の事、さて當時の出來事を追想し、明治維新といへば直ちに西郷、木戸、大久保、の三傑を思ひ出し、二月十一日に遇へば神武天皇橿原宮等の事を思ひ起すが如く、嘗て時或は場所を俱にして、同じく腦に入りたる觀念は、相互に連合して、再生を容易ならしむるものである。之を俱在觀念は互に連合して再生するといふのである。余嘗て十一月三日天長節の當日青山練兵場に觀兵式を拜觀した。で年々十一月三日の佳節に逢ふ毎に、青山練兵所の光景が胸に浮ぶのである。又青山練兵場を通る際には、直に十一月三日を思ひ出し同じく當時の光景が現はれて來るのである。彼岸が來れ

ば團子を思ひ、團子を食へば彼岸を思ふといふやうな俚諺だとか、鑿言は、樵、だとか、落語家のよくいふ、かごに乗る人かつぐ人其又草靴を作る人といふやうなものは何れも空間又は時間を俱にして存在せる觀念の再生である。吾人が懐舊の情に涙のこぼるゝのも、具在法の然らしむるものである。詩歌等の情に關するものは、多く此の俱左法の應用と謂つてよろしいのである。其一例を擧ぐれば、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」。「去年今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在此、捧侍日々拜ニ餘香」の如き是である。此他叙事詩にも多いのである。「春やとき、花や遅きと、聞わかむ、鶯だにも鳴かすも有かな」人はいざ心も知らずふるさとは花ぞむかしの香にほひける」の如き其一例である。

余は十數年來日本俚諺について研究を爲して居るものであるが我國民の謬信に關する俚諺の多きには殆ど一驚を喫せざるを得ないのである。而して此謬信即謬信といふのは多く此俱在法から來て居るのである。蓋し迷信の起りは偶然の出來事、即

ち偶然の俱在に依つた事を必然の俱在と誤解するに基くものである。例へば牛の皮を積み出すと暴風起るとか、夕刻に子供が騒ぐときは翌日雨が降るとか、彗星が出ると戦争があるといふ如きをいふのであるが牛の皮を積み出すといふこと、暴風起るといふこと、其間に何等因果的の關係がない如く、夕刻小供が騒ぐといふこと、翌日雨が降るといふこと、彗星といふものと戦争といふものとも又毫も因果的の關係はないのである。唯前に一度牛の皮を積み出した翌日偶然風が吹いたことがあつたので、今度また牛の皮を積み出すと、ソラ風が吹くだらうといひ、前に小供が夕刻に騒いで、其翌日雨が降つたことがあつたものだから、其れで遂に夕刻小供が騒ぐと、翌日雨が降るだらうといひ、前に彗星の出たとき戦争があつたものだから、其れで遂に彗星が出ると戦争が起るだらうといふに至つたのである。又よく世間に例の多いことであるが、人が病氣に罹つたとき、醫者に見て貰つて薬用を長く續けて見たが、其間に一向驗が見えないといふので、水天宮の御札だとか御

岳さんの御符だとかいふものを飲んで、其後に病氣が癒つた。さうすると、此札だとか、符だとかいふものが、病を癒すといふことに何の効驗がないにも拘らず偶然病の癒る時に持込んだものだから、其病人若くは其家人などが、此符だとか、札だとかいふものが、非常に難有いものと信するやうになるのである。即ち右の札、或は符といふもので、病氣が癒るといふこと、が、何時も俱在して關係して居る様になる。是れが所謂迷信といふもので俱在法から來るといふことなのである。而して此の俱在觀念の聯合は、催眠術治療上に於て大に關係があるといふことは、讀者の思半に過ぐることだらうと信するのである。

(四) 繼續の觀念は互に連合して再生す

黒雲墨を翻して、未だ山を遮らざるに白雨珠を跳らして亂れて船に入るとは、有名なる蘇東坡の詩であるが、此の白雨珠を跳らすと前後して必ず雷鳴のあるものである。即ち黒雲と、雷鳴と、大雨とは、常に續出するものである。それ故に、他日黒

雲が天を蔽うて、墨を離したやうなを見るときには、雷鳴と大雨とを想ひ出すが如くに、繼續して腦に入りたる観念は、其中の一観念を意識に現はすときには他の観念は、隨て順次に再生せらるゝものである。即ち吾人今品川より電車に乗りて上野迄行くに品川、新橋、京橋、日本橋、萬世橋といふやうに、順次に各停留場を経て此等の停留場が頭の中に繼續して残つて居るときには、品川といふと、直に其次は新橋、其次は京橋、其次は日本橋といふやうに連續して再生することが出来るのである。斯の如きを稱して繼續せる観念は再び聯合し、再生するといふのである。備考、此繼續の観念と前の俱在観念とを合して接近の観念と命名する人がある。又以上四種の観念再生相結合し複雑なるものを、複雑連合と稱する人がある。吾人は通常此複雑聯合によりて観念を再生する場合は甚だ多いのである。

第三節 観念再生を容易ならしむる事項

吾人は前節に於て、観念の再生すること及其再生は有意のものあり、無意のものあり、又直觀の助けに依るものあり、其助けに依らざるものあるといふこと。而して其何れを問はず、すべて再生は多く観念の連合によつて行はれ、又其連合には四通りの法あるといふことを順次述べ來つたのである。そこで本節に於ては如何にせば、観念の再生を容易ならしむることが出来るかといふ問題を研究して見やうと思ふのである。さて観念の再生を容易ならしめやうといふには、此連合の最も必要なことはいふまでもないことであるが、尙他に再生を容易ならしむべき事情がある。

一) 身體の健全
腦は精神の府であつて観念活動の本部であるから最も強健なるを要するのである。而して腦の強健ならんことを欲するには、必身體が健全でなければならぬ。身體の健全なるを要するに、(一)身體の健全(二)観念の明瞭(三)適當の配列(四)観念の反復(五)観念の興味等の如きもの是である。若し此等の事情に缺くる所があると、再生は自ら難澁で、且つ其成績不良たるを免るゝことが出来ないものである。

一) 身體の健全
腦は精神の府であつて観念活動の本部であるから最も強健なるを要するのである。而して腦の強健ならんことを欲するには、必身體が健全でなければならぬ。身體

が健全であれば脳も健全である。脳が健全であれば観念を收得し保存すること易く、又再生することも易いのである。

(二) 観念の明瞭
始め先づ收得するときに明瞭であつて観念は之を再生することも甚だ容易であるが。初めに其観念を造るときに曖昧にして置いたならば再生することが出来ないものである。

(三) 適當の配列
観念が若し適當なる配列を保つて居れば強力なる連合をなして一團體を形造ることが出来るから再生することが容易いのである。例へば地理で吉野の事を學び同時に又歴史の方で楠正行の事を學び或は該に於て花は櫻人は武士といふを學んだとすれば吉野、櫻、武士、楠正行、等の観念が強力なる一群列を作り一條の繩を以てつないだやうになつて居て何れかの一を再生すれば他は皆其縁によつて容易に再生せらるゝものである。

生せらるゝものである。

(四) 観念の反復

吾人が汽車に乗りて東海道とか關西とか山陽とかの鐵道旅行を爲すに唯一回にては其經過の途次に停車場のある各驛を一々名稱を覺へたとしても時日を経るに従ひて漸次明瞭の度を減じ遂に全く忘却するに至るものであるが、數回旅行して反復するときは印象が益鞏固となつて遂には全く忘却することなく容易く再生せらるゝやうになるのである。是故に反復といふことは観念を鞏固する上に至極大切なのである。催眠術に於て暗示が或観念を惹起せしめやうとしても容易に起らぬといふ場合にも數遍反復して暗示を加へたならば遂に其暗示が成効するのである。それは畢竟此理に基くのである。

(五) 観念の興味

吾人の面白いと感じたる所のものやとか面白くつてたまらぬといふやうな事件は忘

れやうとしても忘れられないものである。即ち吾人の経験する所の事項が大に興味を覚ゆるものであるならば、之を再生することが容易いのである。

第四節 暗示命令の概要

(1) 通常状態に在つて拒絶する所の暗示は、催眠状態に在つても、受容することは決して無いのである。

(2) 催眠状態の敏捷状態に在つては、暗示に抵抗することの出来る如くに、昏睡状態に在つても猶暗示に抵抗することが出来るのである。

(3) 催眠状態に在つては、清浄の心を増すものである。即ち暗示によつては、通常状態に在つて受容したるものも、催眠状態に在つては、拒否すること有るのである。

(4) 一時の氣變りから暗示を拒否することがある。

(5) 催眠状態に於ける精神状態の試験は、無害なる事實ならざるべからず。

(意識と催眠術の條参照)

第五節 催眠状態に於ける暗示受容の傾向

催眠状態に於ける暗示受容の傾向は、暗示自らの動作に依つて増加するものである。

此の點が催眠状態と通常状態との相違である。今假りに催眠状態と、通常状態とは、實際上同じきものである、又兩者の區別は暗示感性に因るものであるといふ論を真なりと許すも、催眠状態の被術者の暗示感性は、豫め心理的及生理的の變化興起することなくして、獨暗示のみに因つて増加するものであると断定するに至つては、

吾人は何に依つて之を真なりと證することが出来るか、吾人をしてヘルンハイム及其他の人々が陳べたるものに付いて考究せしめよ。汝は一層暗示に應ずるに至りませしといふ言葉若しくは、斯様な語は、人爲的に作りたるものであると想像出來る。假に此の言葉若しくは是れに類似の語が十分に通常状態から催眠状態に變せしむることが出来るものであると許し又被術者の暗示感性を増すものであると許すならば、吾人は通常状態のもの、即ち他の言葉を以て言へば暗示感性の微弱なるもの

は、催眠状態に於けるが如き感化と類似の感化を現はすことないのであるといふことを豫め明示して置かねばならぬ。然りと雖ども通常状態に於ける暗示は屢々暗示感性を増したる暗示と相聯想することがある。例へば乞丐者が施物を哀求するに、唯施物を惠與せられんことを懇願するばかりでなくして、直接間接にあらゆる妙案妙術を盡して、惠與者に暗示を爲すのである。即ち惠與者の憐憫の情を動かして、彼等の哀願の目的に應せしむるのである。換言すれば、暗示に感應し易くなるのである。

されども催眠状態と通常状態との間には著しき相異の點があるのである。即ち催眠状態に在つては、既に認知せられたる一定式の言語を一二回穩かに繰返して、暗示感性を増加することが出来るのであるが、通常状態に在つては之れと同様の結果を得ようとせば、屢々強制的で且つまづの手段を借るのでなければ、決して斯かる結果を望むこと出来ないものである。

第六節 催眠状態に於ける暗示の結果と通常状態に於ける暗示の結果

吾人若し催眠状態のものに用ひし暗示を、之れと同じ方法に因つて通常状態のものに用ひたる場合を考ふるならば、即ち其暗示の結果相類似せる點の極めて不完全なることを知るに足るだらう。之れを一言して謂はゞ身體の冷血中に活動する精神作用の結果は、其の類似の場合極めて稀で、其關係も重要なものでないものである。之に反して吾人若し目を強き感情状態の結果に顧みるならば多少催眠状態に於ける現象に類似せる多くの現象を観ることるのである。然りと雖ども同一の結果は、必ずしも同一の原因によるといふことが出来ないものである。然れども催眠状態に於ける暗示の結果と、通常状態に於ける暗示の結果と相類似して居るといふ論たるや、主として精神作用の結果に基せるもので、感情状態の結果に付いては一切與り知らざるものであるが故に、其の類似たる甚だ以て不完全のものたること必然の理であ

る。通常状態に於て、催眠状態に於ける現象と類似の結果を生ずる場合には、常に恐怖、希望、信仰、宗教上の激動等を伴ふものである。然るに催眠状態を惹起せしむるに於ては、是れ等の事情は全く其の必要を見ざるのみならず、就中恐怖の如きは、絶對的に催眠状態の惹起を妨碍するものである。此の故に催眠現象は此等の事情を要せずして喚起せらるゝのである。然るに通常状態に於て催眠状態と同様の現象を得やうとするには、是等の事情あるのでなければ、決して得ること出来ないのである。之に反して催眠状態惹起の場合に於て、是等の事情の中、何か存することあつたならば、催眠状態の惹起を補助するところであらうて、却つて之を障害するものである。今暗示の現出に伴ふ是れ等の事情の中の著しき相違に關しては暫く之を措いて論ぜざるも、猶催眠状態と、通常状態との間に於ける現象、自ら相異せるの點、存せるものあるのである。今是れ等の點を列記すれば左の通りである。

第一、催眠状態に於ける暗示

- (1) 一度深い催眠状態を生起し、且つ心理的及生理的兩者の範圍廣き現象を現出せしことあるものは、何時にても又被術者の承諾を得たる場合には、何人でも、此の状態を惹起せしむることが出来るのである。
- (2) 現象は即時に反對の現象に變化せしむることが出来るのである。即ち筋肉強硬より痲痺に變じアネセシアよりハイブラセシアに變ずることが出来るが如きをいふのである。
- (3) 催眠現象は意志に依つて覺醒し得らるゝのである。
- (4) 催眠現象の現出する時期を遅延せしむることが出来る。例へば催眠状態に於て或現象は十二ヶ月の後に至つて現出するといふ暗示を感應せしむることが出来る。所謂殘續暗示の効を奏することが出来るのである。
- (5) 二大制限を越えざる暗示は、常に感應せらるゝものである。詳言すれば被術者の徳性上の觀念に反することを暗示に含まざること、又暗示は被術者の催眠状態

態の勢力範圍外のものを與へざることである。

- (6) 5に陳べたる所の事情に従ふときは、正しく感應性を豫告出來るのである。換言すれば相似たる刺激は同一の結果を生ずるものである。
- (7) 催眠状態に於ては容易に暗示に感應する所の被術者が、覺醒状態に在つては縱へ其の暗示が感情状態を相聯想せしむるのでありしに拘らず、屢々暗示に抵抗せしことあるものである。一例を擧ぐれば、多年間酒癖のありし或被術者が、覺醒状態に於てさまざまに多くの暗示を受けたのである。即ち其の朋友親戚の心痛、及び訓誡は、酒癖者に對して最も強勢なる暗示であつたのである。又一方に於ては酒癖者の財産と名譽との亡失、及び飲酒の結果甚だしき悔恨を伴ふ生理的の苦痛等も、酒癖者に取りては、強烈なる暗示であつたのである。然れども此等の暗示は一も奏効しなかつたのであるが、催眠術を受けてから後は、全く飲酒癖を矯正することが出來たのである。

(8) 催眠術の暗示は之を反復するに従つて効力を増加するものである。

第二、感情事情の暗示

- (1) 合成現象は常に孤立せるものである。若其の數に於ても、同時に催眠せる被術者に惹起せられたる現象に比すれば、甚だ限定せられたるものである。即ちすべての人が、此の現象を生起せしむること出來ないのである。例へば國王の手に觸れて非常なる感動を受けたるものが、田夫の手に觸れて、之れと同じき感動を起すことは恐くあり得べからざることである。
- (2) 一の現象は、其の現象を生起したる感情状態に變化を生ずるのでなければ、即時に反對の現象に變ずることは出來ない。
- (3) 感情的の現象は意志に因つて覺醒するのである。
- (4) 現象の出現する時期を遅延することも、亦決定することも出來ないのである。
- (5) 生起したる現象は催眠状態に於けるよりも不明瞭である。甲の被術者に生理的

感應を生せしめたる感情事情は乙の被術者にも同様の結果を生せしむるといふことは出来ないものである。

- (6) 同一の感情事情より同様の生理的現象を常に生起するものでないものであるが、反對に同一の感情より各異の被術者にさまざまの相異せる状態を屢々喚起せしむることあるのである。例へば恐怖は恐怖者に麻痺を生せしむるのである。而して一方に於ては又烈しき筋肉の運動を刺激するのである。
- (7) 通常状態に於て、或暗示に感應せざるものが催眠状態に在つては、それと同様の暗示に容易に感應すること屢々であるのである。
- (8) 感情的の暗示は之を反覆するに従つて、其効力を減殺するものである。詳言すれば恐怖の暗示を反覆するに従つて、被術者は之れに慣れて、前の恐怖を蔑視するに至るのである。

第六節 暗示は催眠状態及其現象を説明するものであるか

暗示は、催眠状態、及び其現象を、説明するものであるか、といふ問題に對しては、然うでないに答へざるを得ないのである。暗示奏効は暗示自らに依るものではなくて、多くは被術者の心中にある所の生得の事情に關するものである。即ち其生得の事情といふのは

- (一) 暗示を受容し實行する所の願望がある
- (二) 斯くする所の力を有して居るのである

之を要するに、催眠状態に於けるものは、犯罪的の暗示、又は不適當なる暗示に非ざる以上は、大抵は、(一)の状態を表現するのである。唯だ(二)の力に至つては大に催眠状態の深淺の度に關するものである、又被術者の人格にも依るのである。例へば同じ言語で三人のものにアナルゼシアの暗示を爲し得たとしても、其結果は各々相異して居るのである。

甲は深いアナルゼシアに成りたるも、乙は稍や淺いアナルゼシアを現はし、丙は少

しも現はさないとはいふやうなことがある。是れと同じ道理で、若し三人の競馬者が、各自其馬をして、若干の距離を或一定の時間内に駆けしむるに當りては、聲を以て暗示を爲し、刺馬輪も、轆も、同様に暗示を興ふることが出来るのであるけれども、其の結果は三馬各々相異して居るのである。即ち甲の馬は暗示に感應して、定まれる時間内に其距離に達することが出来たのである。而して此の馬は此の技を遂ぐる所の願望と、能力との兩者を具備して居つたのである。乙の馬は稍暗示に感應して、殆ど甲の如くに其の技を遂げたのである。而して此の馬は願望を有してたのであるけれども、技能に於て、其の力不十分であつたのである。丙の馬は十分に技能を有して居つたのであるが、併ながら願望を有して居らなかつたので、獨り競争を嫌ふのみならず反對の方向に逸走し去つたのである。

右の三馬競争の話の如く、暗示は同一であつても其結果に相違のあるは、畢竟各自の事情に基くのである。是れ即ち催眠状態に種類多くある所以で、又催眠状態中

ても其暗示奏効に高下のある所以である。

術者は被術者に催眠現象を伴ふ所の状態を惹起せしむることが出来るのであるが、それは決して術者が此の状態を創作するものでないとマイヤアが謂つた如くに、被術者の觀念に來由するものであるから。暗示は被術者の精神に納得出来るやうに導かねばならないのである。之を要するに、催眠状態に於て、主もなる事情は、催眠現象を惹起せしむる爲に用ふる方法に非ずして、催眠状態を喚起し得べき、特別の状態をいふのである。暗示が催眠現象を説明することは宛かもピストルの發放が、ポートレースを説明するのと同じ理由である。即ち單に合圖に過ぎないのである、唯だ出發を示すばかりである。ベルンハイムは「サゼツション」といふ語に全く新しき意義を附して居つて、メスメリズムのオデイリツク力とは、唯其名に於て相異して居る丈である。ベルンハイムの暗示の意義は、神秘的で全能力を具備して居るのである。而して獨り催眠現象を喚起し或は説明し得る所の力を有するのみならず

して、亦催眠状態を想起し得るものであると想像したのである。若し此の意見に依つて考ふるならば、暗示は常に競争を示すのみならず、潛手を作り、又ポイントをも作るものであるといはざるを得ないのである。

第七節 暗示に關してブレードとナンシー派との間に於ける意見の相違

暗示に關してブレードとナンシー派との間の意見の相違は、主として理論上の相違であつて、實地上の相違ではないのである。ナンシー派の言語暗示に依るが如くに、ブレードも亦此の暗示を用ひたのである。然れどもベルンハイムは、此の事實を打消して左の如く言つて居るブレードが、最も普通に言語暗示に依つて、催眠状態を起し、醫療的結果を生ずるものであることを考へずして、暗示を用ひたるは奇といふべきである。ブレードは暗示の心理的感化に依つて治病上に於ける催眠術の靈驗を説明し得ることを夢にも思はざりしことである。然れどもブレードは、之れを知

らずして、暗示を用ひて居つたのである。

此の説は、ブレードの最近の著述せるものを知らざるに基くものといふべきである。即ち是れ等の著書に於て、ブレードが、治病上に言語暗示を用ひしことに關して、委しく明白に論示し、さまざまの實例をも指示して居るのである。然れども、ブレードの實地に用ひし暗示に關してはベルンハイムの謂へるが如く、而して暗示に關するブレードの理論的思考についても、大にベルンハイムと相異して居る。

ブレードは少しも暗示を以て、催眠現象を説明するものと考へなかつたのである。唯後に於てマイヤアと同じく暗示は催眠現象を興起せしむる爲に用ふる一種の術であると思ふのである。ブレードはすべて心理的現象の現はるゝや、最初身體の變化に依つて可能的のものとなつたのである。而して是れ等の變化の結果として、施術者は、機械師が機械を取扱ふが如くに、被術者を操縦することが出来、而して又被術者の身體に存する力を誘導することが出来ると考へたのである。

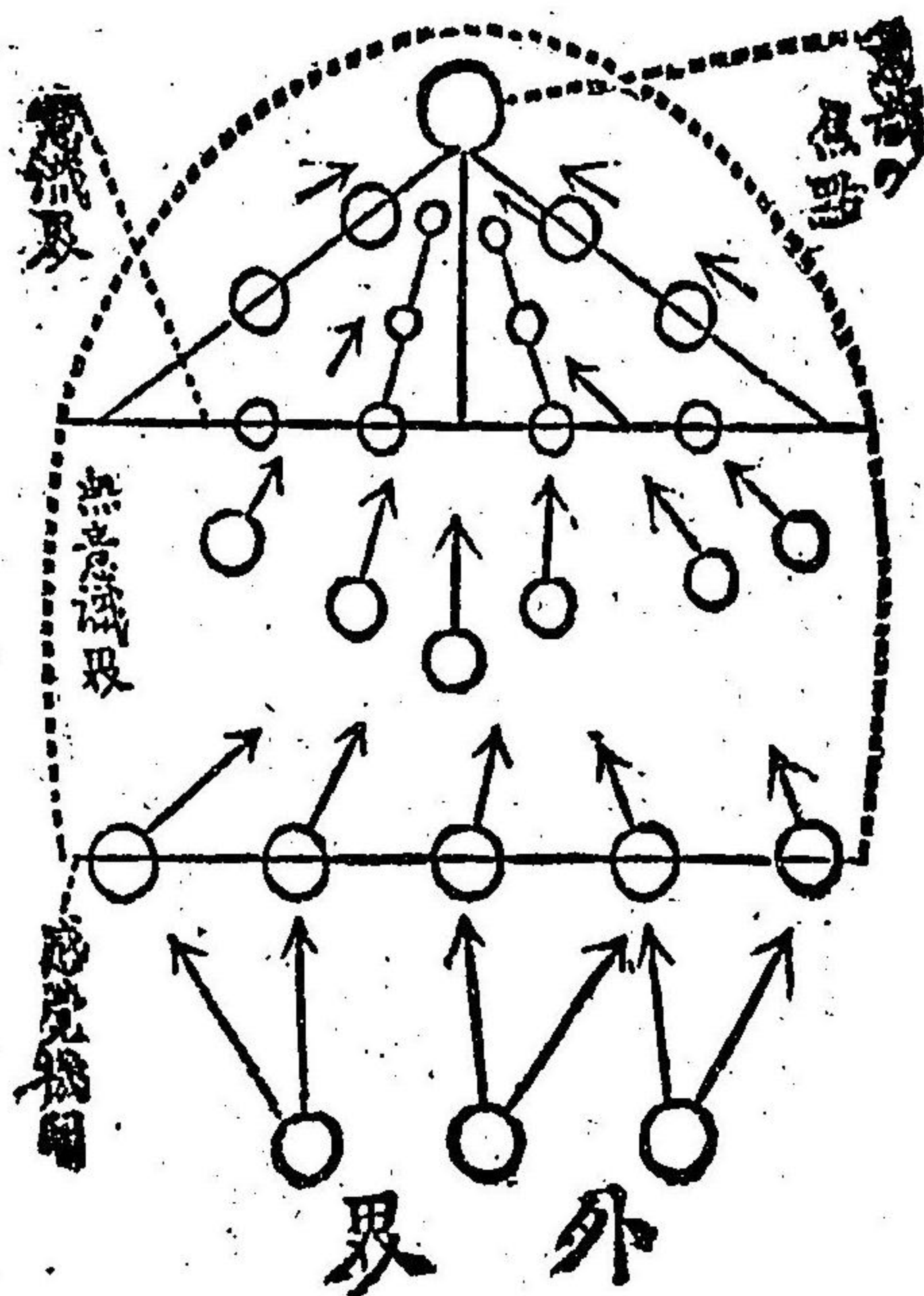
第十八章 注意と催眠術

第二節 通常状態の注意と催眠状態の注意

注意といふのは俗に所謂氣を付けることである。注意は何れの精神作用にも伴ふ所の極めて大切な作用で、物を見物を聞いても注意することが無かつたならば、觀念を作らない若しくは再生しないのである。見れども見えず聞けども聞えず食へども其味を知らずといふのは注意といふ作用の缺乏して居るときに其觀念を作ることが出来ないことを證明したものである。而して心理學上より注意を説明すれば、注意とは觀念を意識の上に集合せしむる一種の状態をいふのである。例へば事物を視るとか聞くとかするときに、意識を其方に向け視聽の一點に觀念を活動せしむるが如きは注意した状態である。故に注意せなんだ時に觀念の生ずること無かつたものも、注意するときには、其觀念が獨意識の上に明瞭に現はるゝことになるのである。

る。其代り他の觀念は無意識界に隠れてしまうことになるのである。而して意識のある所、多少の注意のないといふことはないのである。吾人が通常或事に付いて不注意であるといふのは、他の事に注意を向けて居るといふことが多いのである。通常状態に於て吾人の注意といふものは、同一の事物の上に長く同一の強きを以て作用することが出来ないで、始終強弱變化して居るのである。且つ又甲の事物より乙の事物にと流轉變移して行くものである。然るに催眠状態に於ける注意といふものは、頗る奇體なもので通常状態に於けるが如くに、注意を變轉せしむる所の外界の刺激といふものがないのである。通常状態に於ては外界の刺激が絶えず感覺機關を通過して腦の中樞部に廣集して來るのである。従つて意識界に觀念の出没が激しいので單に一觀念を意識上に凝集せしむるといふことが困難である。だから一事物に注意を長く續けることが出来ない、之に反して催眠状態には感覺機關は門を閉ぢたやうに、刺激を入ることがない、精神

通常状態に於て
注意したる時の有様



状態は無念無想即ち意識の上に観念が現はれないのである。けれども注意が作用せ
ないとはいはれぬ。何となれば術者の暗示に應じて観念を意識の上に現はす、しか
も其観念は至極明瞭で獨意識を占領して居るからである。而して術者の暗示に刺激
せらるゝの外自發的に観念が起らないから、他の観念が其意識を襲ふといふ患がな
いから意識に現はれたる観念は非常に強力な猛勢な影響を生理的方面に及ぼすこと
が出来るのである。是點から論じて行けば催眠状態中の注意は、通常状態に比して
遙に意識上に観念を凝集することが出来るのである。而して其注意は暗示の刺激の
まに／＼變移するばかりで、毫も自發的に甲の事物より乙の事物に遷流することが
無いのである。今通常状態に於ける注意の有様と催眠状態に於ける注意の有様とを
對照すれば左の如くである。

催眠状態に先んじ、或は之に伴ひて起る身體上の變化に關しては、ブレードとペン
ンハイムとの間に、其意見を異にして居るけれども、催眠状態及び其現象を惹起す
る爲に注意の必要なる問題に關しては、二人共に同一の意見を有して居るのである。
ブレードの説に従へば、催眠状態を容易に惹起する原因に二つあるのである。

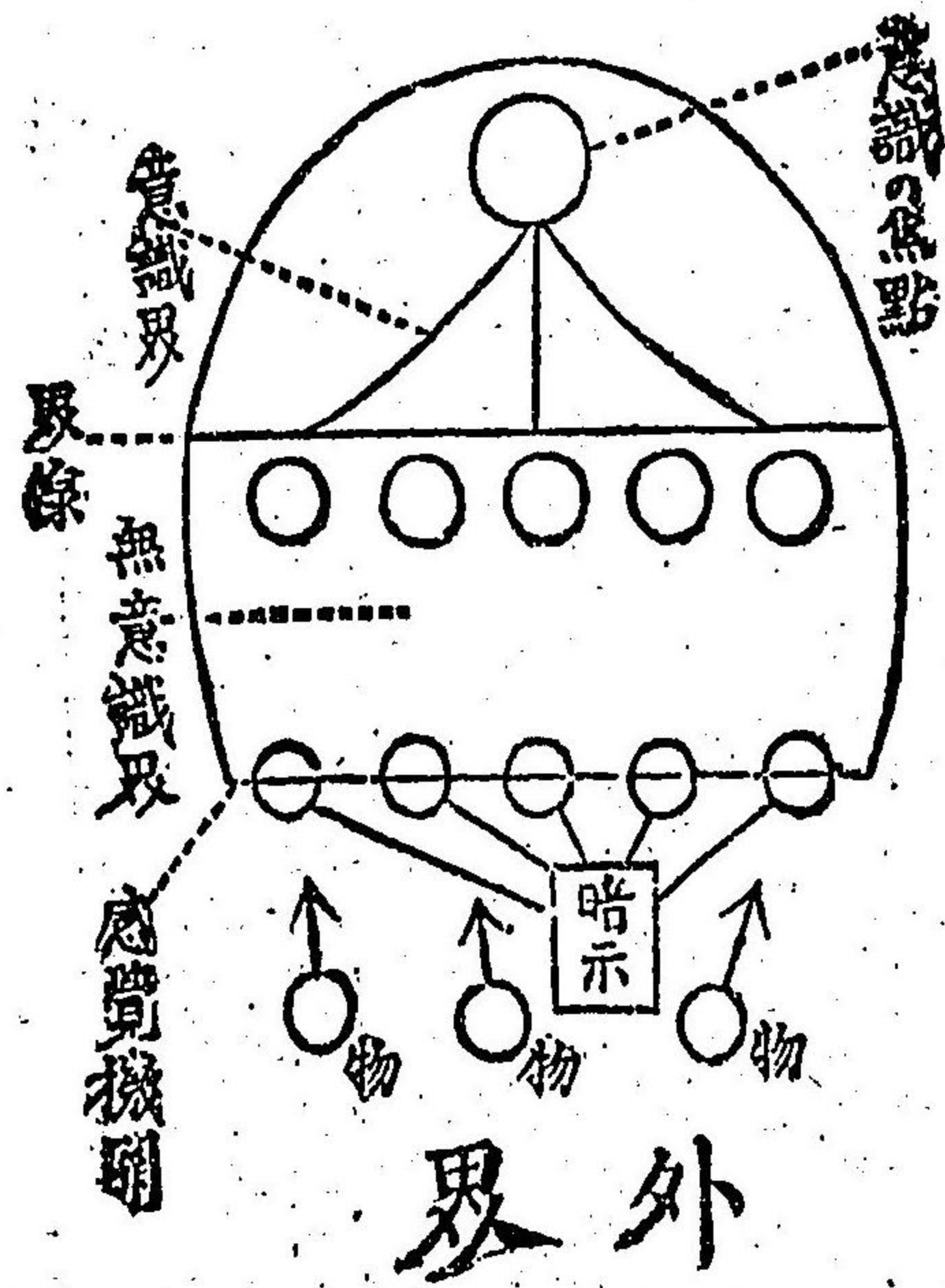
(一) 或外界の物體上に、注意を凝集すること。

(二) 催眠術に關する或觀念の上に、注意を集すること。

通常睡眠及催眠的睡眠の起る原因は、注意の固定と、睡眠てふ觀念の上に作用す
る神経力とに依るものであると、リエボー及びベルンハイムは考へたのである。世
人のいふ如く、人の睡眠せんと欲する時は、静かな場所を選び、沈思黙想して成る
べく、安静を保つのである。斯くて神経力は極めて單純なる、觀念の上のみ、集
中せられて、漸次に、知覺神經、感情神經、及特殊感覺神經等を脱走するに至るの

第二節 催眠状態の惹起に要する注意

催眠状態に於て
注意したる時の有様



である。催眠状態を惹起する事情も、之れに異なる所ないのである。即ち被術者に告げて眠るといふ觀念にのみ心を傾注せしむるのである。而して被術者自らも心の傾注を助くる爲に、或物體を凝視せしむるやうに導くのである。斯くて身體の安静を得、諸感覺は遲鈍となりて、漸次に外界の事物から遠かりて、終に思想の活動亦休止するに至るのである。

注意の集中力が、催眠状態の惹起を容易ならしむることは疑の無いことである。例へば自然の注意力に乏しく、又有意的の注意を、全く有せざる白痴の如きものは、到底催眠状態を惹起すること出来ないのである。其の他精神病患者の如きヒステリー患者の如き、注意を容易に敏く他の條溝に變向するものは、催眠の感化を與ふること甚だ困難である。注意と催眠状態の惹起との間に存する關係を研究すれば、其重なる點は左の如くである。

一、眠るといふ觀念の上に注意を集中することは必ずしも必要といふ道理でないのである。吾人既に述べたるが如く、ブレードは被術者をして、一の外形物體を凝視せしめ、而して其の物體の觀念の上に被術者の注意を傾注せしめて催眠状態を惹起せしめたのである。加之ならず首として催眠状態は、睡眠に類似せしむることを要せないのである。即ち被術者の眼を閉ぢさせないでも、淺い敏捷催眠状態を惹起せしむることが出来るのである。

二、首たる催眠状態は、或外形物體の上にも、若くは睡眠の觀念の上にも注意の集中を判然現はすことの出来ない場合に於て、往々惹起せらるゝことがあるのである。此場合に於て被術者は、術者の試験を諾したる後は、靜に睡り精神活動をも有意的に減するのである。而して被術者は出来る限りすべての思想を斥けて、虚心平氣即ち無念無想の状態になるのである。

三、ガルネーの言へる如く、或一の方向に心を奪ふこと催眠術の現象に頗る類似

せる所ありといふ自然睡遊の現象も、其現はるゝに於ては全く、豫め注意の傾注を要することないのである。

四、一度催眠状態を惹起せるものは、豫め制限せられたる合圖に感應して、何れの時に於ても且實際は瞬時に此の状態を喚起するものである。而して此の場合に在つては、被術者の注意を瞬時には、其合圖に向はしむることが出来るのであると雖ども、長時間の間、注意を凝集することないのである。

第三節 注意の凝集は、催眠状態を生ずるの原因となるか。

ガルネーのいへるが如くに、假令吾人の見解を狭めて催眠状態を惹起するには、注意の凝集を要すといふ場合にのみ、限界するとしても、何如なる理に因つて、注意の凝集は催眠状態を惹起するの原因といふことを得べきか。精神若しくは身體が一方に偏する天性の現はるゝは、普通世に知られたる所である。又強力なる注意の牽制は、催眠的失神状態のさまざまの特性を表はす方向に偏して、心の吸収せられた

ることを明示するものであるといふべきである。然れども今鈕子を手に取りんとして、指圖せられたる注意の牽制が、若しも更に新奇の物體の方に注意を轉向せられたる場合には、新なる牽制を生ずる爲に、如何なる傾向を有するか。ガルネー曰く、新なる觀念に對する注意の變化は、甚だ容易であり且つ其變化たる甚だ瞬時に起るものである。即ち普通催眠方法を施す間に、凝集せられたる注意が、後には全く不規則に變易し易くなりたるを研究せりと。此の注意の大變化は鈕子に對する最初の強固なる注意より起りたる奇異なる結果であるといふべきである。ガルネー又曰く、若し余に或る格段なる精神状態即ち一方に偏向したる注意、若しくは固定したる注意等の精神状態は、或精神現象を表現する所の原因であると、語るものあらば、余は即ち事の秩序は或る觀察し得べき循環を現はすものである。即ち少くとも余が經驗に依つて、豫期せる所のものに、正反對の方向に走るものでないといふことを正しく證することが出来るのである。

更に又ガルネーの所謂催眠状態の惹起中に於ける注意の凝集を要する場合のみに付いて、考へて見るに若し被術者が催眠状態を呈したる場合に、被術者の此の状態が、通常無念無想といふ事實をガルネーの説は如何にして説明することが出来るだらうか。余は此の場合に於て豫め注意の集中の想像したる結果に、反對の結果の自然に現出するものであることを想像するのである。

此の故に豫め注意の凝集は、其の結果變動し易いことを説明するものとは認むること出来ぬ。唯吾人の認め得る所のものは即ち、左の二條である。

一 注意の凝集は、屢催眠状態を惹起する前に起るもので、又常に催眠状態の惹起を容易ならしむるものである。

二 催眠状態中の注意の凝集は、極めて變動せしめ易いものである。

第十九章 ラポート及注意

リエポー曰く、殆どすべて人為的睡遊状態のものは、其れをして此の状態を惹起せしめたる所のものと精神上に一の關係を爲して居る。而して其の關係たる唯術者にのみ限れることは、吾人の觀察する所である。若し被術者が、深い睡眠を爲したる時は、すべて術者が被術者に語る所のものを能く聞くことが出来るのである。而して術者のいふことのみである。即ち術者が被術者に向つて姓名を呼び掛くる時は、被術者は之れを聞くのであるが、他のものが呼びかかれば、乃ち彼れは其れを聞かぬのである。リエポーの説に依れば、被術者が術者との間に一のラポートの存する所以のものは、被術者の睡眠するに當つて、術者を思想しつゝ眠るのである。即ち之れは屢々通常睡眠にある所のものと相異なるのである。例へば母親が子供を寢就かせる時に、自ら睡眠しても、猶心を小兒の上に奪はれて居るのである。それ故

に小児が微聲にて叫ぶとも、能く之れを聞くのであるが、爾餘の大なる音響等に對しては、無感覺なることあると同じいのである。術者の上に、被術者の注意を集中すると、又被術者の精神に、術者といふ觀念の把住とが、抑もラポートの現はるゝ原因である。

ラポートに關して、ベルンハイムは、之に反對の意見を持つて居る。即ちベルンハイムは通常睡眠と催眠的睡眠との間に相違あることも示して曰く、通常睡眠に在つては、自覺即ち意識作用を失ふと同時に、外界の物と關係を絶つのである。換言すれば睡眠者自己と關係を保つの外、全く他と關係を絶つのである。人為的に生じたる催眠状態に於ては被術者の精神に術者の記憶を存して居るのである。其故に術者の想像、夢想を暗示する所の力、或は睡眠中意志の衰滅より、若くは全く意志を失ひたるより、自ら支配し得ざる所の動作を、誘起せしむるの力等は睡眠者に關係を及ぼすものである。

次に講述する所のものはブレードの催眠状態に於ける注意の状態に關する説である。

催眠を通常睡眠との間に存する、主なる相異は即ち精神状態に於て之れを見ることが出来るのである。通常睡眠に陥りたるものは軽重なく、甲の觀念より乙の觀念に移り易いのである。而して整然たる思想の關係の上に、注意を固定することが出来ない、若くは多少有意的努力を要する動作をなすことも出来ないものである。此の結果として、若し睡眠者が聴き得べき暗示を爲し、又は感覺上の感觸を興へて、睡眠者之れを感じて、全然覺醒するに至らなければ、稀に睡眠者に夢を見せさすことが出来るのである。即ち其の夢に於て暗示せられたる觀念が、判然たる身體上の動作を刺激せずして、精神上に現はるのである。之に反して催眠状態を興す爲に用ふる方法の結果たる注意の集中は、催眠状態を現はしたる時に於ても猶存するものである。而して此の場合の言語暗示にても、若くは感官の感觸にても、夢を生起する

のでは、なうて、明晰なる思想の關聯、又は身體上の動作を鼓舞せしむることが出来るのであると。

ブレードの説に依れば、催眠状態に於ける注意の状態は、外界の暗示に應ずることあるが、却て或る特別の人即ち催眠せしめたる人に依て、與へられる暗示に對しては應じないことあるのであるといふのである。暗示によつて、被術者が唯術者との間にのみ、ラポートを生ぜる如くに見ゆる人爲的狀態を惹起せしむることが出来るのであるけれども、此の状態はたゞ外觀ばかりであつて、眞の状態でないのである。縱令妙技を得たる方法を用ひて、被術者をして、只術者の暗示のみを感應せしめんとしても、實際被術者は他の暗示をも聞くのであると言つて居る。之に付いてブレードは一例を擧げて説明して居る。即ちブレードは或睡遊状態のものをして、將に現はれんとせる事柄に付いて、確實なる豫言的の形に間接の暗示を爲して、之れに感應せしめたのである。しかも此の被術者はブレードが術を施したるものでなうて、

ブレードが此の室に入り來りし時は、既に睡遊状態を呈して居たので、而して外觀上、只原の術者との間にのみラポートが成り立つて居たのであつたと言つて居る。

ラポートはメスメル及其の弟子の間には知られなかつたのである。而してメスメリズムが天下普く行はるゝに至るまでは全く發見せられなかつたことは事實である。と、カーペンタアは言つて居る。即ち催眠法が偏く傳はり、廣く用ひられざりし間は、ラポートの現象をも、猶認識せられなかつたのである。ラポートに付いて無學であつた、メスメリズムを傳ふる人々は、種々の多くの著しき現象を生起せしむることが出来たのであるけれども、ラポートの現象に關しては、未だ發見せられなかつたのである。後に至り始めて此の觀念が、此等の人々の心に浮んで被術者に移すのに至つたのである。

ペルンハイム及びリエポーは、被術者と術者との間には、眞のラポートが存して居つて、而して必ず催眠状態を惹起する爲に用ふる方法の自然の結果として、必ず現

はるゝものであると信じて居つた。番に存して居るのみならず、催眠現象を喚起せしむる術者の力は、二にラポートに在るのであるとベルンハイムは言つて居る。吾人が既に見たる如く、ラポートに關しては、ベルンハイムとリエポトとの間に、説の相異せるものあれども、術者と被術者との間に、眞のラポートありといふ點だけは、兩者とも其考を同じうして居る。即ちベルンハイムはラポートを以て催眠的睡眠と、通常睡眠との間の、唯一の相異であるといひ、リエポトは之に反してラポートを以て、催眠と通常睡眠との間に、一の類似あることを論證せんと欲したのである。ラポートに關するブランウエルの觀察は、稍ブレードの説と相同じきものである。即ち一ラポートは直接若くは間接の暗示なくして現はるゝものでない。二ラポートの状態は常に外觀のみであつて、決して眞實のものであるといふことは出来ない。それ故に被術者はラポートを置かない他のものから言はるゝ所のこと、又は作さるゝ所のことを、能く覺知して居ることは常に實驗に依つて證することが出来る。

所のことである。自ら豫期することを知らざるものにラポートに關する直接及び間接の暗示を爲さざる時はラポートの状態を表現するものでない、其代りに誰にても、彼等に話しかくるものに對して、其話を聞き且つ其れに服従することもあるのである。モールも亦、ラポートに關しては、ブレードの説と同じ意見である。モール曰く、ラポートの現はるゝ原因は術者の直接若くは間接の暗示によるものである、若くは又催眠状態の性質に關して被術者の有する思想より來る自己暗示によるものである。リエポトの明示せる如く、ラポートは睡れる母親と小供との間に屢々存するものである。即ち母親が微かなる小供の叫び聲といへども、能く聞ゆるのである。然るに之れよりも大なる他の音響に對しては無感覺であるといふは事實である。然りとはいへども、是れを以て催眠状態に於けるものと相類似して居るといふことは出来ない。

十分誘導せられざる睡遊状態のものは、術者の外に他の音聲をも術者の音聲と同様に容易に感應するものである。而して縦令術者一人の音聲にのみ應じて、他の音聲は聞えないと教へても、被術者は猶他の音聲を聞くのである。

第二十章 氣質と催眠

氣質の性質 十人よれば十色といふ諺の如く、人の氣質には各自に他人と區別すべき特徴の存するものである。例へば同一の事柄に對しても、或人は熱心に、或人は冷淡に又或人は沈着に、或人は輕躁に、其他慎重なるがあり、輕卒なるがあり、快活なるがあり、憂鬱なるがあり、敏捷なるがあり遲鈍なるがある等の如く種々の相異なるのは、要するに氣質の發現に外ならぬのである。

氣質の原因 氣質は、其の一部は天稟に原因し、一部は人の心の作用、即ち知、情、意、の作用の種々の度及び形式によるものである。前者は祖先よりの或遺傳的の傾向を言ひ、後者は人の教育の程度、及び自然の境遇周囲の状態等の如何により、相異なるものをいふのである。

氣質に關する研究 氣質の事に就いては、古來學者の研究に乏しいことはない。

上古に在つては希臘のヒポクラテス氏は氣質を以て人體を構成せる、地水火風の四元素の分量の多寡によるものと考へたのである。即ち地分の多きものは地性、水分の多きものは水性、で火性風性亦各其の分量の多きによつて生ずるものとしたのである。支那に於ても、木火土金水の五行に應じて人の性を區別したのは略是れに類して居る。然るにガレーノス氏に至りて、氣質は人體に流布せる液汁の分量如何によつて、分るゝものと考へ、從て血液の多量なるは、多血質とし、膽汁の多量なるは膽液質とし、黒膽汁の多量なるは、黒膽液質（後に神經質と呼ぶもの是れなり）粘液質の多量なるは粘液質としたのである。是れは専ら面部に現はれたる色等より推考したる假定説であつて其體液質の如きは生理學上信すべからざるものであるに拘らず、此四種の分類法に於ては現時に至つても、心理學諸大家皆之を襲用し、其名稱も依然として之を改めないものである。而して現今心理學の研究する所によれば、氣質の原因は主として遺傳より來れる神經組織の狀態に基くもので、其心理的方面

から見て、此質を分けるには外界の刺激に應ずる感受力の強弱と遲速との關係によるものなることを證明して居る。そこで此感受力の強弱と遲速とを左の如くに此四質に對照するのである。

氣質の種類と感受力との關係 今之を左に對照して示さう。

膽液質……感受力速くして且つ強し。即ち吞込速くして持のよいのである……

……(熱性)

神經質……感受力遅くして持強し。即ち吞込が遅いが持がよいのである……

……(鬱性)

多血質……感受力速くして持弱し。即ち吞込が速いが持がよくないのである

……(浮性)

粘液質……感受力遅くして且持も弱し。即ち吞込が遅くて持も悪いのである

……(冷性)

次に又生理的方面、即ち外貌上より分けるときは左の如くである。

膽液質……餘り肥え過ぎもせず體が締つて居る

神經質……瘠せ方の相を現はす

多血質……能く肥滿して居る體相である

粘液質……體がダブ／＼したやうで締りが無い

此他猶此四種の氣質の特徴は容貌言語舉動知識感情等各種の作用と爲つて發表せらるゝものである。今各質につきて其特征と其應用とを左に示さう。

一、膽液質

此氣質に屬するものは筋骨が逞しくして容貌が伶俐で、姿勢が正しく、炯眼瀟歩し感覺智力意志共に鋭敏で記憶強く其の言語舉動は確實壯大である。特に果斷決行の力に富み、又よく忍耐刻苦して捷ます名譽心自尊の念頗る強く常に權勢を以て人の上に立たんことを熱望するものである。此の如き傾向は既に幼童の時より遊戯其

他共同に事を爲す間に於て、其の發現を見るのである。即ち遊戯の際は餓鬼大將となりて、他の衆童を指揮壓服せうとし、競争に於ては必ず勝を制せざれば止まぬといふやうな特徴を呈するのである。此の性質は長じて勇敢の氣象と爲り、剛邁不屈の氣象となるものである。而して其職業に於ては軍人政治家等最も適當であらう。是故に此氣質の人は若し善き方面に發達すれば、勇敢、剛毅、進取、熱心、敏捷、寛大、公明、高尚、の人と爲り、有爲の大人物となり、偉丈夫となつて、社會の注目を惹くに至るものであるが、之に反して悪しき方面に發達すれば、倨傲、放肆、殘忍、自負、執拗、粗暴等に陥りて大罪を犯し、社會の安寧秩序を破る所の悪人毒婦となるの恐れがある。俗に所謂善に強ければ悪にも強いとか、或は悪に強ければ善にも強いとかいふやうな人は此質の特徴である。

二、神經質

此氣質に屬する人は概して長身で瘠せた方である。體質は弱くて筋肉の發達が不十

分である。頭は前に傾き、眼光鋭く、皮膚蒼白で、顔容憂を含み、又疲勞せるやうに見ゆるものが多い。神経は過敏で感受力強い、喜悅少く常に沈鬱である、注意は綿密で、思考は精細で、言語は少くて動作は謹慎である。沈思熟考するも果斷の力に乏しく、事に當りて熟察考慮、容易に決定することが出来ない。然れども一旦決心したる事は固く執りて動かない、最も執念深い、又常に他人の胸中を邪推して之を猜忌し、容易に人を信用することが出来ない、故に他人に接しても、胸襟を開いて圓滑に交際することが出来ない。嫉妬心が深く、名譽心も亦強い、兒童の此氣質を有するものは、性頗る怯懦で、活潑でない。他の小兒と遊戯することを避け、單獨を好み、或は室隅に潜伏するに至るものがある。但し實直にして信義を守り、能く忍耐勉強し、教師を煩はすこと少く、特に其の叱責を畏れ、常に賞讃を得んことに汲々として居る、斯かる兒童が善き方面に發達すれば嚴肅、忍耐、沈着にして深く靜に思考し、詩人、哲學者、宗教家、數學者及び理學者等と爲るに適し、比類なき偉人物となることが出来る。之に反して惡しき方面に發達すれば嫉妬、怯懦、疑惑、猜忌等の心に富み、悲觀厭世の人物と爲る恐れがある。

三、多血質
此氣質に屬するものは、紅頬秀眸で、言語動作敏捷にして、輕浮であつて、神經興奮し易く容易に感動し、又容易に冷却す、物事に無頓着で頗る快活である。唯意志が極めて弱く、忍耐持久の精神に乏しい。多人數相集りて談笑することを好み、閑靜の地に獨居することを好まない。能く笑ひ能く談じ又泣き易いのである。其注意は絶えず他に移り、記憶想像の學科に長じて、思考の學科に拙である。特に數學、理學等の知識を缺くもの多い。又能く滑稽に巧み、多藝多能にして特に美術工藝に屬する技能を有し、同情に深くして欲望が少い。兒童の多數は此氣質を有するものである。此の氣質の人が善き方面に發達すれば快活、從順、淡泊にして、同情に厚く、交際を圓滑にすることが出来るが、惡しき方面に發達すれば輕薄、放恣、虚飾、

分である。頭は前に傾き、眼光鋭く、皮膚蒼白で、顔容憂を含み、又疲勞せるやうに見ゆるものが多い。神経は過敏で感受力強い、喜悅少く常に沈鬱である、注意は綿密で、思考は精細で、言語は少くて動作は謹慎である。沈思熟考するも果斷の力に乏しく、事に當りて熟察考慮、容易に決定することが出来ない。然れども一旦決心したる事は固く執りて動かない、最も執念深い、又常に他人の胸中を邪推して之を猜忌し、容易に人を信用することが出来ない、故に他人に接しても、胸襟を開いて圓滑に交際することが出来ない。嫉妬心が深く、名譽心も亦強い、兒童の此氣質を有するものは、性頗る怯懦で、活潑でない。他の小兒と遊戯することを避け、單獨を好み、或は室隅に潜伏するに至るものがある。但し實直にして信義を守り、能く忍耐勉強し、教師を煩はすこと少く、特に其の叱責を畏れ、常に賞讃を得んことに汲々として居る、斯かる兒童が善き方面に發達すれば嚴肅、忍耐、沈着にして深く靜に思考し、詩人、哲學者、宗教家、數學者及び理學者等と爲るに適し、比類なき偉人物となることが出来る。之に反して惡しき方面に發達すれば嫉妬、怯懦、疑惑、猜忌等の心に富み、悲觀厭世の人物と爲る恐れがある。

狡猾にして相手にならぬ人となる恐れがある。

四、粘液質

此氣質に屬するものは身體脂肪に富み、筋骨力弱く、眼光鈍く記憶薄弱で、感情冷淡で、喜怒哀樂の感薄く、意志が弱く、動作不活潑で、言語思考共に緩慢で、敢爲決行の氣力なく、從て進取の氣象に乏しく、物事に冷淡で、たゞ當座の安逸を貪り、性無邪氣で、虚飾の念なく、又事物を隠すといふことはない。此氣質の人が善き方面に發達すれば、沈靜謹直で、過失が少なく他人と争ふことなく從つて、交際を圓滑になすことが出来る。之に反して惡しき方面に發達すれば遲鈍、懶惰、冷淡等に陥り、深切同情を缺き他人に侮慢せられ、何の役にも立たぬものとなる恐れがある。

以上氣質の分け方及び其の特徴等は通例心理學者の一般に認定する所であるが、此他に人相家者流の此四質に對する説明がある。それは重もに外貌上より説いて居

つて多少趣の相異なる所がある。参考の爲左に抄録するのである。

一、神經質

- 一 顔面は蒼白なり
- 一 筋肉は弱
- 一 頭髮鬚鬚は多く軟弱
- 一 音聲優美
- 一 鼻溝深し
- 一 精神は知覺常に敏、奸佞、詭辯、譏譽
- 一 身體は姿容を粧ふ風あり
- 一 眼瞳は常に四方を射る
- 一 眉毛は多く薄し
- 一 齒牙は整列
- 一 唇は紅

二、多血質

- 一 身體白く肥えて長大なり
- 一 顔面大にして頭蓋も亦大なり
- 一 面色は紅を潮し光澤あり眼光輝々白球に綠色を帯ぶ
- 一 筋肉は強健
- 一 運動は活潑

一 毛髮は強大にして鬆粗なり
 一 血液は多量
 するに服心を以てす。膽力強く頑として動かすべからざる風あり、感情深し。
 豪放、磊落、義俠、硬直、慄悍

三、粘液質（癩癩質又屑弱質）或は淋沬質ともいふ

一 外形は下服膨脹し脂肪多し
 一 動作は遲鈍
 一 眉は淡し
 一 眼光は鈍にして人に接せば常に俯視するの風あり
 一 齒牙は亂生或は斜生
 一 音聲は濁
 一 容貌常に愁ふるが如く又眠るが如し

一 音聲洪大
 一 精神 淡白、胸中洒然として、人に接

四、膽液質

一 皮膚は黒
 一 膽汁多量
 一 鼻は尖つて居る
 一 聲は濁
 一 骨格大
 一 筋肉強
 一 精神 喜怒哀樂の情に急にして、凡て事物に執着の性あり
 一 容貌常に愁苦の状あり
 一 眼は光なし
 一 身體長大

一 精神 喜怒哀樂の情に急にして、凡て事物に執着の性あり
 氣質と催眠感受性との關係 如何なる氣質の人が、催眠し易く、如何なる氣質の人が催眠し難きかといふに、吾人の經驗する所に依れば、膽液質の人が最も催眠し易く、其次は粘液質の人で、其次は多血質の人で、神經質の勝ちたる人は最も催眠し難いのである。

然るに此に注意すべきは、人の氣質は大體以上の四種に區別して居るけれども、如何なる人でも純粹に或一質を備ふるといふことは稀であつて、大抵は此四質彼此混和して居るのである。其中最も膽液質に勝つて居るとか、神經質の特徴が多いとかいふやうな、種々の混り工合に依りて又各種の氣質が現はれ來ることである。氣質と配偶との關係 夫れ結婚は人一代の一大重典なれば、其配偶の撰擇を慎むべきことは固より言を俟たざる所であるが、通常我國にては其撰擇の標準を、財産地位才能品性等と爲して亦毫も氣質の如何を問はざるが如き有様である。然るに西洋にては氣質の如何といふことを以て配偶撰擇上の一條件となし夫婦互に其質の反對なるを求めて、結婚するを大上吉と爲すといふことである。今左に其の氣質と配偶との關係を擧げやう。

一、男女同氣質、例へば膽液質と膽液質と若しくは神經質と神經質との如き配偶は頗る不良で多くは孕まず若し生息あるとも過半は夭折するか、又は軟弱なるかである。

二、夫婦の一人は膽液質一人は神經質の配偶であると、生兒の生育善くして、且器量骨柄衆人に立ち優りて、後來卓越したる人物となるのである。併し斯の如き大吉の縁組と雖ども夫婦の間常に睦まじからぬか、又は不養生等の事あれば、生兒も夭折か或は生兒の痴愚なるを生産するといふやうなことがある。

三、夫婦の一人は膽液質一人は多血質の配偶なれば、生兒の生育は、悪しきに非ざれども、器量才智は二の場合に及ばず。

四、夫婦の一人は神經質一人は多血質の配偶なれば生兒の生育よろしく且つ器量才智も鋭敏なれども、骨組の軟弱に傾き易い愛がある。

五、粘液質の人は何れの配偶に於ても、生兒の生育がよろしくないものである。

六、夫婦の氣質が一分同質即ち膽液神經質の混つたものと多血神經質(多血質に神經質)との配偶は生兒多分軟弱にして丁年に至らずして死する者が多いか、或は腸腺腦

病瘡腫等の病災に罹りて生長を害するかである。故に膽液神經質の人は純粹多血質の人を擇みて結婚するを吉とし、又多血神經質の人は純粹膽液質の人を擇みて結婚するを吉とし、又多血膽液質の人は純粹神經質の人を擇みて結婚するを吉とするのである。

氣質と年齢との關係　氣質は年齢の成長と共に益明瞭に、其特質を顯はすに至るものかといふに、必ずしも然うとは限らないのである。即ち其氣質により明瞭に發現すべき時期を異にして居るものである。例へば多血質は幼年に於て、既に著しく其特點を見はせども、膽液質の如きは稍成長の後でなければ、是れを明に視ることが出来ないやうである。是れ其の年齢に相當して發達すべき、一般の心性に一致せると否とによつて、然るものである。是故に人によりては往々其幼時と成長後は、全く一變したやうな觀がある。ロツツエは多血質と幼童期に比較し、神經質を少年期に比較し、膽液質を成年期に比較し、粘液質を老年期に比較して居る。蓋し

小兒が外界の刺激に應じて容易く之れを把捉し熱慮を運らさずして、物事に關與し又久しく一事に注意することの出来ない特性は、最も能く多血質の呈する特徴に類似して居る。年齢漸く進みて、稍推理的的思想の發達する時期即ち所謂少年期に及びては宇宙の道理を推究しやうといふ、所謂推理的興味といふものが發生し自然に沈黙熱慮の氣象を帯ぶるに至るものである。而して其表徴は漸く神經質に類似するのである。更に進みて成人期に至るといふと、一定の意見が既に確立して居て、常に定見を具へ、事物に迷ふことなきに至り、果斷決行をよくする等、殆ど膽液質の如き風を帯ぶるに至るものである。既に此時期を経過して老年期に至つては舉動不活潑に、萬事に冷淡にして、其の舉止は粘液質に類似して居るのである。

一、膽液質の催眠術及教育上の注意

(イ) 催眠術上の注意　此質の人は注意の集中が容易であつて、氣が散らない方

であるから催眠し易い。術者は唯氣臆れすることなく、確乎たる信念と、猛烈なる意志と誠實なる同情とを以て、催眠せしむることに全力を注ぐといふ熱心が肝要である。

(ロ) 教育上の注意 此質のものを教育するには教育者は十分謹嚴にして威重を備ふることが大切である。又児童を愛し好意を表するは必要の事であるが、狎れ親しむは却つて宜しくないのである。特に其の傲慢心を折制して、謙讓の徳を備へしめ、勉めて利己心を退けて、公共の爲に盡す習慣を養ひ、其活動をして、公德の上に發露せしむるやうに適切なる誘導を加ふることが肝要である。

ペロープ曰く、膽液質の小兒をして、其教育宜しきを得ざらしめたならば、甚しき悪戯を爲して、他の児童に厭がらるゝやうになる。粗暴と激烈とは此質に屬するもの、常である。教育者は是れに對するに必ず濃厚篤實を以て善く是れを誘導し決して悪しき行爲に陥らしめてはならぬと。

二、神經質の催眠術上及教育上の注意

(イ) 催眠術上の注意 此質の人の催眠困難なるは、神經過敏なるが爲に、注意が一點に集まらぬ、氣が散亂し易いといふこと、及び不安の念が禁じがたさが爲に、心が平穩に落ち着くことが出来ないやうな傾向が存するに因るものである。故に此質の人に對しては滿腔の熱誠と同情とを注いで、溫和に深切に出来る丈被術者の歡心を得るやうにし、決して其感情を害して厭苦せしむるやうな舉動あつてはならない。其相對する瞬間機微の際、既に被術者をして覺えず術者に信頼せざるを得ざる底の吸引力を、被術者の心中に投ずる妙機を外してはならぬ。

(ロ) 教育上の注意 此氣質の兒童に對して、教育者は常にやさしく當りて、特に深切を盡し以て其親愛の情に感せしむるやうに導くことが大切である。若し過失或は不都合のありたる場合には、靜に之を諭告して、決して強く叱責してはならぬ。蓋し此質の兒童は一般に怯懦であるが故に、不意に高き音響を聞かしても恐怖

し、特に教師の叱聲を聞きては、甚しく驚愕してそれが爲に、夜中安眠を得ざるに至ることもあるものである。加之一度斯かる恐怖心を抱かしたときには、永く不快の念を保ちて、親愛の情を回復し難いものである。又此質のものは、兎角憂鬱に陥り易いもので、夫れが爲益心身を害するやうになるから、勉めて快潤の心情を保たしむるやうに誘導することが至極重要である。若し空気の汚損せる時は、神経質のものは第一に頭痛を感じ、甚しきは卒倒するに至ることがある。故に注意して、永く一室内に止むることなく、勉めて新鮮なる空気に於て活潑に能く運動せしめ、且つ夜は早く寝させて、朝早く起くる習慣を養はしむることがよろしい。

三、多血質の催眠術上及教育上の注意

(イ) 催眠術上の注意 此質に屬する被術者は、頗る氣が散り易い、即ち注意が散漫し易いものであるから、催眠し難いことが往々ある。故に施術の際には成る

べく音響の聞えざる静なる室に於て、注意を轉せしむるやうなもの悉く遠ざけて勉めて其心機動を静穩にならしむるやう徐に呼氣を數へしむるやうな方法を取るのが上策である。

(ロ) 教育上の注意 此質の兒童に對しては、教授の際注意を他に惹くべきものを遠ざくることが大切である。而して教師の言動は、快活にして、教授法につき變化あるを要するのである。且つ此の活動性を利用して間斷なく仕事を課することが甚だ必要である。又此の質のものは耐忍熱慮に乏しきが常であるから、勉めて刻苦勉強を奨励しすべての行爲に於ては、能く熱慮し、一旦事業を始むるときは、其結果の如何に關せず、必ず忍耐して其の事業を遂行するやうに勉めしめ、又遊戯體操等を盛に行はしめ、其の活力を洩らさしむることが必要である。斯の如くすれば輕快浮佻の精神を稍静穩ならしむることが出来る。又此の氣質の生徒には、屢問答を試みて、其の注意を集中し、且つ思考を綿密にし言語を嚴正ならしむ

四、粘液質の催眠術上及教育上の注意

(イ)此の質の人の催眠状態になり易いといふのは、要するに被術者に反抗するといふ、氣合がなく、また無邪氣であるといふことに原因するのである。されば往々深い睡遊状態を呈して覺醒の時にも容易に覺醒せざるやうな事がある。故に覺醒法に注意すればよいのである。覺醒に關する注意は拙著催眠術全書、及催眠術實地傳習に詳説して居りますから參照を請ふのであります。

(ロ)教育上の注意 此質の兒童には規律正しく體操を爲さしめ又盛に遊戯運動を爲さしめて血液の循環を善くし、神經を興奮せしめて、自ら其の動作を活潑ならしむるやうに導くを要す。又課業の如きは一時に多量に課すれば元氣を失ふ恐れあるから成るべく其の時間を短くして其間は嚴正に之れに注意せしむるやうにし、又屢々問答を試みるがよろしい。

第二十一章 記憶と催眠術

世人の通常唱ふる所の彼の人は物覺えがよいとか、此の人は物覺えが悪いとかいふ、物覺えといふ語は、所謂記憶といふことを指すのである。而して記憶といふことは之を通俗的に言へば、物を覺えて居つて後に思ひ出すといふことである。即ち記憶とは觀念を原形の儘に再生したる心像をいふのである。而して此記憶は、吾人が曾て收得したる觀念を心中に貯藏して置いて、一旦必要ある時に臨み之を再生して其用を爲すこと、譬へば貨財を倉庫の中に貯藏して、必要の際取り出すが如きものであるから、其重要なること固より言を俟たないのである。即ち此作用あるから吾人の觀念群は益々廣くなり、益々密となり、益々深くなるに至るのである。若し人にし記憶がなかつたならば、現在直觀せる觀念は、恰かも底の無い桶に水を容るゝが如く、一分一秒其の刹那々に消滅してしまつて、一の想像をも判斷をも爲すこ

とが出来ないのである。吾人は到底吾人の記憶に存する以上の事物を知ることが出来ないのである。

記憶の範圍及強弱 記憶の範圍及強弱は、人により年齢によりて大に異なるものである。即ち或ものは言語の記憶に長じ、或ものは數量の記憶に長じ、或ものは美文、詩歌の記憶に長じ、或ものは化學の符號を記憶するに長ずる等の如くに、決して一樣でないのである。加之其の記憶が容易であるか、將た困難であるか、神速であるか、遲緩であるか、或は永久的であるか、一時的であるか、又は確實であるか、曖昧であるか等種々の差別がある。斯の如く人の記憶は種々相異があるが、之を要するに其事項の種類及方法の如何を問はず、完全なる記憶の標準は何であるかといふに、左の諸條件を具備せんければならないのである。

- 一、觀念を原形の儘少しも間違なく再生すること
- 二、能く其時間空間上の關係を記憶して曾て觀念を得たる其時日及場所を確知す

ること

三、迅速に再生すること

四、永久に再生の出来ること

今此の四個條件につきて左に詳しく説明しませう。

(一) 觀念を原形の儘少しも間違なく再生すること。

曾て經驗した所の觀念を貯へて置いて、折角之を再生して見た所が、以前收得したることを間違へて再生するやうでは再生の効能がない、成程あんなことであつた、そんなことであつたとぼんやり記憶して居るのでは、一向役に立たないのである。一旦直観した事は、其通り正しく記憶して、間違の這入らないのが、完全な記憶である。

(二) 能く其時間空間上の關係を記憶して、曾て觀念を得たる其時日及場所を確知する。

觀念を原形の儘に間違なく、再生するばかりでなく、其之を收得したるは何時何處であつたかといふことを記憶すること、即ち是は何時であつたか、又何處であつたかといふ條件の附加つて居ることが必要なのである。

(三) 迅速に再生すること。

(一)(二)の條件ばかりでいかぬ、もう一つ其再生が迅速でなければならぬ。たとへ間違なく再生せられ、しかも其の何時何の場所で経験したのであつたといふことを思ひ出すことが出来るにしても、其再生が手間取れるやうなことで、急な場合の間に合はない。突嗟の間に吾が考を纏めて、臨機應變の處置を取らねばならないやうな場合に臨んで、まあ待つて呉れたまへ、今緩り考へ出して見るといふやうな悠長なことは、此急がしき時代には許さないのである。

(四) 永久に再生の出来ること。

以上述ぶる所の(一)(二)(三)の條件が既に具備しても、猶最後の一條条件が備はつて居らな

ければ完全な記憶とは言はれないのである。即ち其再生が唯一時的でなく未來永久に長く其事を覚えて居るといふのでなければ役に立たない、此久しい間記憶の續くといふこと即ち永久に再生の出来るといふことは、又重要な條件と言はねばならぬ。

之を要するに、吾人が、精神といふ藏の中に貯藏したる觀念といふ品物が年を経る久しきに瀰りても最初貯藏した原の儘朽ちも損じもせないで居て、さて入用の時は即坐に取り出すことが出来、而して其之を貯藏したのは何時であつたか何處から受取つたのであつたかといふことまで一々覚えて居ることの出来るといふ位でなくてはならないのである。如何に藏の中へ財物を澤山貯へて置いて、入用な時に直に取出すことが出来ないとか、或は其れが出来ても折角取り出したものが朽ちて居つて原の形が崩れて了つて居るといふやうな鹽梅では一向役に立たないのである。言葉を換へて言へば一旦経験した事を完全に記憶するといふことは、其経験した事

柄を間違なく覚えて居つて、其之を経験したのは何時何所であつたといふことを知り、年月を経ても長く尙其事柄を即坐に思ひ出すことが出事るといふことである。即ち以上所説の四つの條件の備つて居る者を完全な記憶を爲す人といふのである。以上吾人は完全なる記憶といふものは斯の如くでなければならぬといふことを説明して来たのであるが、果して然らば如何いふ風にしたならば、此の標準に適ふたる完全な記憶を持つことが出来るかといふ問題が起つて来る。然るに記憶といふことは畢竟觀念の再生といふことに過ぎないのであるから、其良否といふことは又彼の觀念再生に要する事情に依つて左右せらるゝこと勿論の話である。即ち前第五節に述べたる觀念の再生を容易ならしむる事項は取りも直さず記憶を完全にする手段となるのである。世間に能くいふ記憶法とか記憶術とかいふものも畢竟觀念再生に要する事情を應用したのに過ぎないのである。されば記憶法といふことに就いては觀念の連合、觀念の明瞭、觀念の反覆、觀念の興味、適當の排列、身體の健全等は

を要するのである。而して此等のことは既に第五節の條下に説明した通りであるが、猶格段に記憶法といふことに就いて、今少し具體的に説明することが必要だらうと思ふから第五節の補遺として述べて置かう。吾人が書を読んで其れを悉く覚えて置くことが難かしいとか或は講話とか演説とか其他、人の談を聞いても直ぐ忘れてしまふといふのは畢竟注意が足らない故である。彼の觀念の興味といふことは結局注意を向けるといふことに歸するのである。余に一つの方法がある。他でもない、吾人が單に注意を向けるやうにと言つた所で往々注意を外すものであるから、書見するとか人の話を聞くとかいふ場合に、是非とも之を人に語つて聞かせやうといふ心持になることなのである。此心持は起し易い、而して此心持になると自然書中の事柄或は人の談柄に就いて注意せずには居られないやうになる。斯くて之を語り聞かせやうとする適當の人が無いならば、壁に向つても宜いから話して見るのである。壁とも談合といふ諺の通りにするのであ

る。此方法は一寸卑屈のやうな迂拙のやうな遣り方であるけれども實際斯ういふ風に工夫すれば記憶は善くなるのである。而して是には二つの理由が含まれて居るのである。即ち人に話して見やうといふ心持を起すといふことは所謂觀念の興味で注意を向けるといふことになるのである。又之を人なり壁なり、便宜自分の相手とする當面のものに向つて話して見るのは所謂觀念の反覆である。

左の話は前高等師範學校教授谷本富先生の講義であるが此説明に關聯した面白い有益な話であるから讀者に紹介するのである。

記憶力は果して真に改良することが出来るか、出来ぬかといふ問題であります。是まで西洋で色々な人の實驗に依りますと十分改良することが出来ますやうです。其の改良法はどういふ風にしたら出来るかといふことに付いては、面白い話がありますから一寸お話をしてみませう。某といふ亞米利加の新聞記者であります。すべて新聞記者といふ者は物を能く覚えて居らぬと困る。長く覚えぬでも宜しい、あち

らからも、こちらからも探訪が種を持つて来る、あちらの探訪は斯ういふことをいふ、こちらの探訪は斯ういふことを言ふ、其の言つて来たことを能く覚えて居て、社説なり雜報なりを書いて行くのであります。所が右の某は不幸にして職業は新聞記者であつても、物覚えが悪くつて能く忘れるから困る、どうかして直さうと工夫をして、それから毎晩寝る時に、床に入る前に一時間ばかりちやんと座るさうして今日はどういふことを言つて来たか、斯ういふ事を言つて来たか、ちやんと朝からの事を考へて見る。成程誰某が来て斯ういふ事を言つたやうに覚える、又翌日起きてからもう一遍事業に就く前に昨日はどういふ事があつたか斯ういふことがあつたと考へるやうにした。そこで是まで快活なる人が毎晩始終何か手を組んで心配して居るやうに見える、そこで細君が心配をして飯を食つた後にあなたや、どうなすつた、何か大變心配事がありなさるやうに見えますがと聞いて見た、所がいや實は斯うくで餘り物覚えが悪いから斯ういふことをやつて居るのだ、夫れは大變宜い事を承はりました、

併し一人で御考なさるならば、いつそのこと私に御話なさつて下すつたら、又あなたも御相手があるから宜からうと考へる、どうか色々な事を私に話して下さらぬかと言つた。それから毎晩寢床に就く前に朝、斯ういふ手紙を書いて……それから斯ういふ話を聞いた、それから誰やらが来たといふことなどを順々に話す、所がどうも始めの中は十分出来ぬ、先程の飯の菜は何であつたか僅か二時間前の酒の肴は何であつたかと言つても早や忘れてしまふ。又来た人の名前が一々覚えて居ることが出来なかつた、所が幾日間経つと何の雑作もなくそれが言へるやうになつた。又書物を見ると幾らか覚ゆるやうになつたといふことがあります。だから記憶といふものは。やらうと思へば改良も出来るものです。併ながら是が魔術があるといふ譯ではありませぬ、語を換へて申しますれば記憶といふものは能く初め注意して其事を十分に反覆してさへ置けば、能く覚えて居るといふことは疑ひませぬ。つまり初に注意するといふ事と反覆するといふこと、が大事であります、今の新聞記者の話は

それでありませぬ、初めは何とも思はなかつたが、細君に今日歸つて話をするには又忘れて居てはつらい待てよ能く覚えて置かう、夫から晩に歸つて反覆する、翌日も亦反覆する、つまり精密に注意して反覆する、屢反覆して遂に妻君にいふ、始終さういふ風によつたから自ら覚えて居るやうになつた夫れで記憶するのは實は外では無い、講釋を聞かうが本を讀まうが初から能く注意して反覆して居れば夫れで能く覚えて居れるといふことは疑ひませぬ。此他記憶を善くすることに就いて緊要なる條件としていふべきことは、心情を安靜ならしむるといふこと、障害の刺激を避くるといふこととである。それはどういふことをいふのであるかといふに吾人の精神は譬へて言はゞ海水のやうなもので其風なき時は一碧湛々として鏡面の如く、月の姿は言ふも更なり、佇立む雲の影も、星の光も、靜に波上に映すことが出来るが、一朝暴風起つて怒濤激浪天を衝いて至るといふやうな時は、月は宿らず、星は言ふまでもなく、雲は勿論其影を映すこと